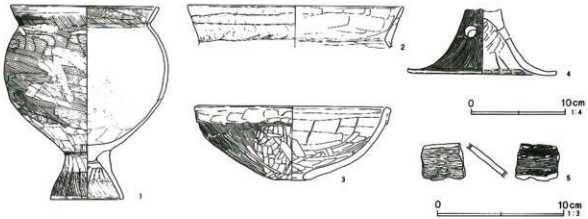
第25図　第６号竪穴住居跡出土遺物



第７号竪穴住居跡（第26図）

Ａ５・６グリッドで検出した。住居跡南東角を中心に検出したもので、大部分が調査範囲外にあり、調査できなかった。平面形は方形もしくは長方形と考えられる。深さ0.40m、西側壁の方位はＮ－37°－Ｗであった。

覆土は焼土・炭化物を多量に含む土壌で、床面付近にはロームブロックが含まれていた。

壁面は垂直に立ちあがっていた。壁溝は全周していたと思われる。壁溝内の覆土はローム主体で、壁材の埋設土、もしくは壁材の抜き取り後に壁面が崩落したものであろう。

炉跡・柱穴・貯蔵穴等は、検出できなかった。調査範囲外に存在する可能性はある。

床面は中央部が硬化しており、若干の凹凸と光沢、少量の鉄・マンガン斑の集積が認められた。掘り方は壁面から50cm程度中央に寄った部分の床面周囲を、若干深く掘り下げていた。貼床層はロームブロックを混入した黒褐色のシルトであったが、上下２層にわけられ、下層ほどロームブロックが多かった。

出土遺物は覆土中に少量分布していた。図示できたのは床面上につぶれて出土した土師器甕（第26図１）と炭化材下の床面直上に出土した複合口縁壺（第26図２）の２点である。

他に、床面に接して多量の炭化材を検出した。各材は北西側に放射状に伸びていた。炭化材の下層に堆積層がないことから、屋根材の可能性が指摘できる。

第７号竪穴住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	甕	(20.6)			ＡＤＧＨ	Ａ	橙	40	外；粗ハケ後細ハケ　内；ヘラナデ
2	壺	15.6			ＡＤＧＨ	Ａ	橙	100	外；ハケ後ヘラナデ　内；ハケ後ミガキ

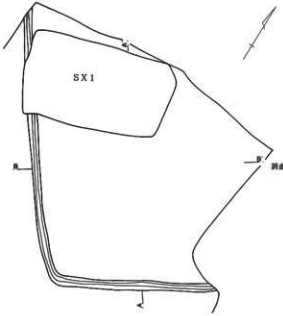
第８号竪穴住居跡（第27・28図）

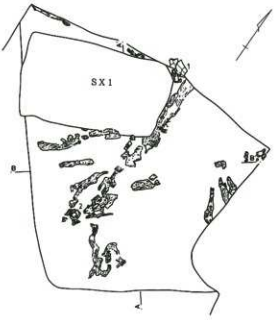
Ａ３・Ｂ３グリッドで検出した。第７号古墳跡および第５号溝跡と重複関係にあり、覆土の平面確認によって、当住居跡が両者に先行すると判断できた。北西角は第５号溝跡によって破壊され、中央北より部分に第７号古墳跡周溝が貫通していたため、東側壁溝の一部が破壊されていた。平面形は長方形であった。規模は長辺4.76m、短辺4.46m、深さ0.20m、長軸方位はＮ－20°－Ｗであった。

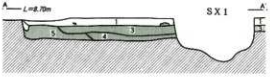
覆土は焼土・炭化物を多量に含む土壌で、床面付近にはロームブロック・焼土が多く含まれていた。

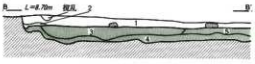
壁面は急に立ちあがっていた。壁溝は破壊された部分以外で全周していた。壁溝内の覆土はローム主体で堅くしまっており、壁材の埋設土と思われる。

第26図　第７号竪穴住居跡および出土遺物



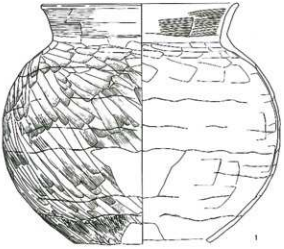


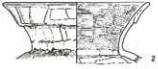




1　暗褐色土　ローム粒多、焼土粒多、炭化物多
2　茶褐色土　ローム粒多
3　黒褐色土　ロームブロック・ローム粒少
4　黄褐色土　ロームブロック多
5　暗褐色土　ローム質で軟弱

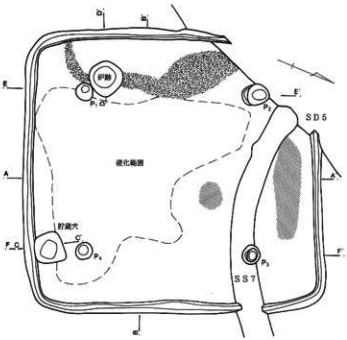
0　2m
1:60

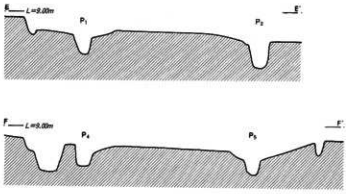


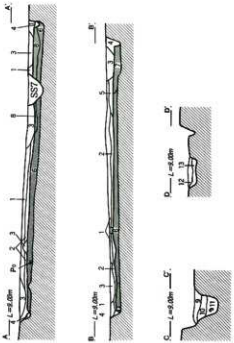


0　10cm
1:4

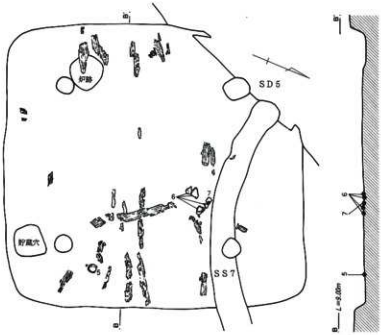
第27図　第8号竪穴住居跡

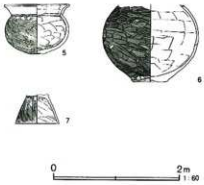






1　暗褐色土　ローム粒多、焼土粒多、炭化物多
2　暗褐色土　1層に比べローム粒多
3　暗褐色土　焼土粒多
4　明褐色土　ローム粒多、堅くしまる
5　明褐色土　ローム粒多、焼土粒多
6　明褐色土　ローム粒多　貼床層
7　暗褐色土　ローム粒をブロック状に含む　貼床層
8　暗褐色土　茶褐色土少、ローム粒少、焼土粒少　貼床層
9　黒褐色土　ローム粒少、焼土粒少
10　暗褐色土　ロームブロック少
11　暗褐色土　ローム粒少、2層よりローム少
12　赤褐色土　ローム粒少、焼土粒多
13　暗褐色土　ロームブロック少、焼土粒少





柱穴は4本で整った長方形に配置されていた。柱間は約270cmであった。P1が径28cm、深さ30cm、P2が長径44cm、短径32cm、深さ42cm、P3が長径30cm、短径28cm、深さ36cm、P4が長径28cm、短径26cm、深さ34cmであった。覆土はいずれも黒褐色の有機質シルト層で、柱材の抜き取り痕はみられなかった。覆土の暗色は、柱材の腐食有機物に由来すると考えられる。

炉跡は南西側柱穴P4脇に設置されていた。平面形はほぼ円形で、径55cm前後、深さ12cm程度に貼床層を掘り窪めていた。底面は平坦で、壁面は斜め直線的に立ち上がっていた。ロームブロックで「火皿」を設けたものと思われ、底面には赤化したロームブロックが多量に分布していた。覆土には多量の焼土が含まれていた。

貯蔵穴は、南辺壁際のうち南東角付近に掘り込まれていた。不整な方形で、一辺47cm程度、深さ37cmであった。底面は平坦で、壁面ははぼ垂直に立ちあがっていた。内部からは少量の土器片を得たが、図示できるものはなかった。

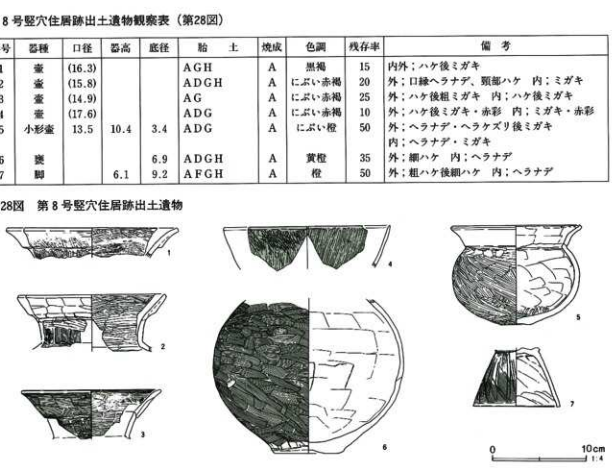
床面は、炉跡・貯蔵穴間から中央部にかけて顕著に硬化していた。若干の盛り上がりがあり、凹凸と光沢、鉄・マンガン斑が認められた。掘り方は床面全面を平らに掘り下げていた。貼床層はロームを多量に用いた明褐色土であった。

西側床面には、明瞭な被熱の形跡があり、顕著に焼土化した部分が認められた。床面全体に、炭化物の分布も認めることができた。また、床に接して、東部を中心に多量の炭化材を検出した。炭化材は東西の壁から直角に住居跡中央方向に伸びており、20cm程度の間隔で並んでいた。太さは5～8cm程度であった。壁際まで伸びる炭化材は、中央で床面に接し、壁際で壁上面へ向かって浮き上がっていた。中央東側には、これらの上部に直交する太さ12cm程度の炭化材1本が出土した。

第8号竪穴住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(16.3)			AGH	A	黒褐	15	内外；ハケ後ミガキ
2	壺	(15.8)			ADGH	A	にぶい赤褐	20	外；口縁ヘラナデ、頸部ハケ　内；ミガキ
3	壺	(14.9)			AG	A	にぶい赤褐	25	外；ハケ後粗ミガキ　内；ハケ後ミガキ
4	壺	(17.6)			ADG	A	にぶい赤褐	10	外；ハケ後ミガキ・赤彩　内；ミガキ・赤彩
5	小形壺	13.5	10.4	3.4	ADG	A	にぶい橙	50	外；ヘラナデ・ヘラケズリ後ミガキ 内；ヘラナデ・ミガキ
6	甕			6.9	ADGH	A	黄橙	35	外；粗ハケ　内；ヘラナデ
7	脚		6.1	9.2	AFGH	A	橙	50	外；粗ハケ後細ハケ　内；ヘラナデ

第28図　第8号竪穴住居跡出土遺物



床面に点在する被熱痕、全面に分布する炭化物、規則的な配列をもつ炭化材の状況から、当住居跡上屋は火を受けたものと考えられる。出土遺物は少ない上、被熱痕跡をもたない。生活段階で焼失したと考える根拠はない。廃絶後、焼却された可能性が高い。出土遺物は焼却後投棄されたものであろう。

壁際へ浮き上がってくる炭化材の状況は、壁に直角に伸びる材が、竪穴部外周に設置された上屋構築材の一部であることを示している。垂木・側柱などと考えられるが、配列と数量をみる限り、前者の可能性が高い。

出土遺物は、主に床面近くの覆土２層中で検出した。完形品はなく、炭化材付近のものは、材上部に重なって出土した。焼却後に廃棄されたものと考えられる。図示したもの以外に単口縁の壺片、甕片等が得られている。

(2) 古墳跡

第１号古墳跡（第29・30図）

Ｅ１・２・３・４、Ｆ１・２・３・４、Ｇ１・２・３・４グリッドにかけて検出した古墳跡である。調査範囲内の台地最高点に立地したものと思われ、中央部の標高は9.3m前後であった。上部を覆う撹乱層(基本層序Ⅰ層）を除去した状況では、古墳跡東側の標高が9.5m程度と高くなっているが、Ｂ２グリッド付近からＧ５グリッドにのびる第２黒色帯の状況と、調査区北側に堆積した暗褐色シルト（沖積層）の状況等から、第１号古墳跡の立地するロームは、第２黒色帯より下層のロームが露出したものと判断できる。

中・近世に掘削された第１・３・４号溝跡、第９・15号土壙と重複関係にあり、覆土の平面確認によって、当古墳跡がこれらに先行すると判断できた。

古墳群中での位置関係は、北10mに第６号古墳跡、東22mに第３号古墳跡、南に第２号古墳跡が隣接するが、第２号古墳跡とは周溝に重複関係があったと考えられる。しかし、重複部分が第１号溝跡によって破壊されており、先後関係を明らかにすることはできなかった。

上層は相当の厚さで削平されたと考えられ、検出できたのは周溝底面付近だけである。

周溝は上層の削平によって浅い部分が失われたものと思われ、数箇所に不連続な部分があったが、本来の平面形態は整った円形だったと推測できる。周囲の古墳の状況から、周溝の一部に掘り残し（以下、陸橋部と記す）があった可能性はあるが、不連続となった部分と区別することはできなかった。なお、周溝西部は調査範囲外にあたり、調査できなかった。

周溝の断面形態は不整な逆台形を基本とするが、底面は平坦とは限らず、掘り方に厳密さは感じられなかった。底面のレベルは一定せず、西部および南部に深い部分がみられた。溝中土壙等の施設は検出できなかった。

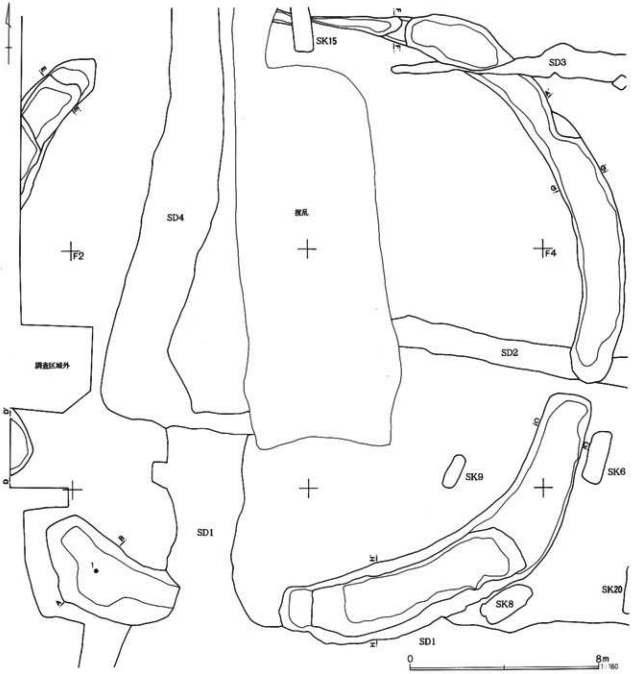
周溝の規模は、内径24.0m、上端幅1.60～3.20m、下端幅1.00～2.80m、最深部は周溝南部で、深さ1.03mであった。

周溝は自然堆積によって埋没しており、墳丘構築材の土質は不明である。

周溝覆土内からは古墳時代前期の土師器片が多く出土したが、付近には、削平によって消滅した同時期の住居跡が存在した可能性が高く、古墳築造(墳丘盛土・周溝掘削等）に際してこれらを破壊したために、遺物が流入したものと考えられる。

第１号古墳跡の築造時期に近いと考えられる遺物は、第30図1の須恵器フラスコ形提瓶の胴部片と、２の土師器甕底部片の２点だけである。

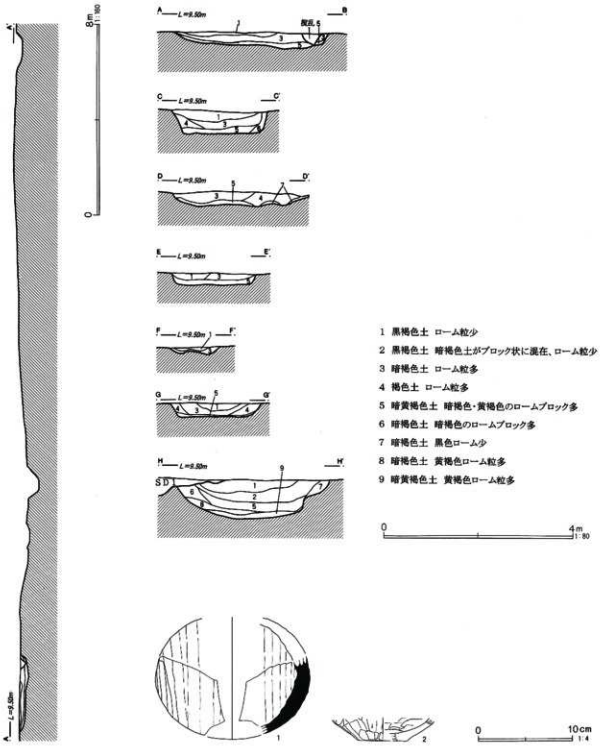
第29図　第Ⅰ号古墳群(1)



第Ⅰ号古墳跡出土遺物観察表（第30図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	提瓶				AG	A	にぶい黄橙	25	胴部回転ヘラケズリ
2	甕			5.2	ADGH	A	にぶい橙	20	外；ヘラケズリ　内；ヘラナデ

第30図　第1号古墳跡(2)



第２号古墳跡（第31・32図）

Ｇ２・３・４、Ｈ２・３・４グリッドにかけて検出した古墳跡である。自然堤防頂部に立地したものと思われ、中央部の標高は9.3m前後であった。上部を覆う撹乱層（基本層序Ｉ層）を除去した状況では、標高9.3m程度の平坦地となっていた。第２黒色帯より下層のロームが露出したもので、本来の遺構面は上部にあったと考えてよい。

古墳時代前期の第１・４号竪穴住居跡、古代の第１号掘立柱建物跡、中・近世に掘削された第１号溝跡、同第５・７・13・14号土壙と重複関係にあり、覆土の平面および断面観察によって、当古墳跡が第１・４号住居跡に遅れ、他のものに先行すると判断できた。

古墳群中での位置関係は、北に第１号古墳跡が隣接するが、第１号古墳跡とは周溝に重複関係があったと考えられる。重複部分は第１号溝跡によって破壊されており、先後関係を明らかにすることはできなかった。22m東には第３号古墳跡が位置していたが、中央に同時期の遺構は検出できなかった。古墳が存在した可能性は否定できない。

上層は相当の厚さで削平されたと考えられ、検出できたのは周溝だけである。

周溝は上層の削平にも関わらず、全体の形状をよく保っていた。第１号溝跡に破壊されていたが、平面形態は整った円形だったと推測できる。

周溝の南西部に陸橋部があり、中心からの方位は、Ｎ－136°－Ｗであった。

周溝の断面形態は整った逆台形を基本とし、底面はほぼ平坦であった。底面のレベルは比較的一定で、陸橋部東側に深い部分がみられた。この部分では、土師器杯５点が出土している。溝中土壙等の施設は検出できなかった。

周溝の規模は、内径12.0m、上端幅1.50～2.00m、下端幅1.00～1.60m、最深部は陸橋部東側で、深さ0.57mであった。

周溝は覆土下層に Hr-FA と思われる白色火山灰層が確認できた。底面付近にはロームブロックを含む層が主に周溝内側から流入しており、墳丘構築材の土質を推測させる。

周溝覆土内からは古墳時代前期の土師器片が多く出土したが、本来墳丘下となっていた第４号住居跡や重複する第１号住居跡のほか、近辺には削平によって消滅した同時期の住居跡が存在した可能性が高く、古墳築造（墳丘盛土・周溝掘削等）に際してこれらを破壊したために、遺物が流入したものと考えられる。

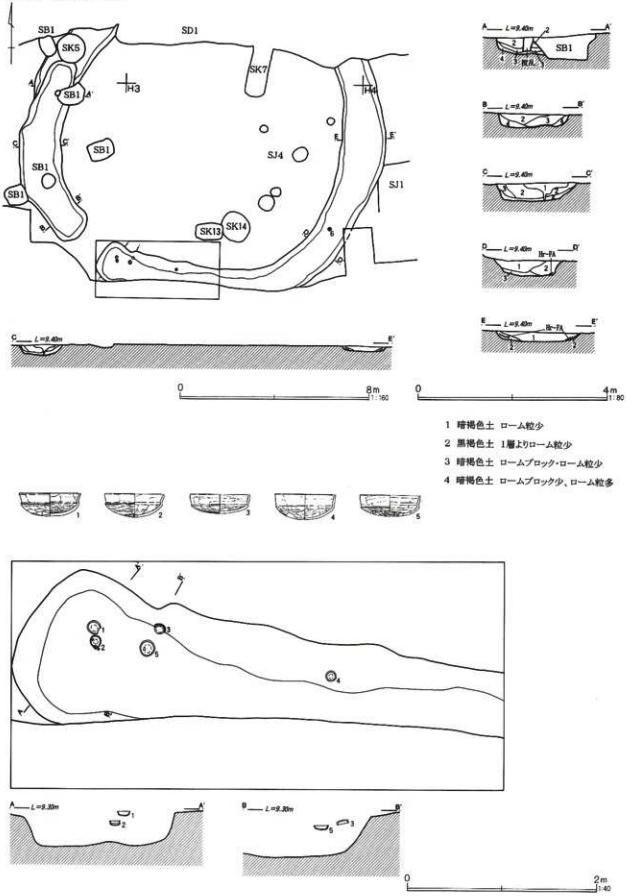
第２号古墳跡にともなう出土遺物は、陸橋部東側の周溝内で出土した完形の土師器杯５点だけである。陸橋部脇の Hr-FA 火山灰を含む２層内（Hr-Faブロックより上部）に、正位３点（第32図１・２・５）、逆位１点（第32図３）が集中して、やや離れた位置の３層上に正位１点（第32図４）が出土した。いずれも周溝が埋没していく過程で、入り込んだものだが、特に、集中して出土した４点は２個１対で出土しており、流入したと考えるより設置されたと考えられる状態であった。内１点は底部に焼成後の穿孔が認められた。出土した土師器杯は、すべて丁寧に内面および外面口縁部が赤彩されていた。ただし、３層上出土の個体に関しては、内面底部中央が塗り残されていた。

他に、滑石製臼玉１点（第32図６）が出土したが、当古墳跡にともなうと断定することはできない。

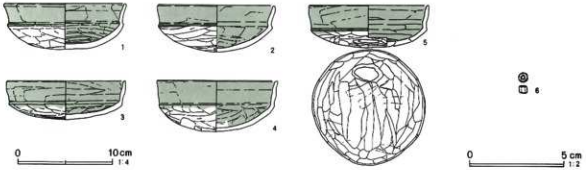
第２号古墳跡出土遺物観察表（第32図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	杯	12.8	4.8		ABDGH	A	にぶい赤褐	95	外；ヘラケズリ・赤彩（口縁）　内；赤彩
2	杯	12.3	4.9		ABCDFGH	A	にぶい橙	95	外；ヘラケズリ・赤彩(口縁)　内；ヘラナデ・赤彩
3	杯	12.5	4.1		ABDF	A	にぶい橙	100	外；ヘラケズリ・赤彩（口縁）　内；赤彩
4	杯	12.8	5.3		ABCDFGH	A	橙	100	外；ヘラケズリ後ナデ・赤彩（口縁） 内；赤彩（底部中央除く）
5	杯	12.5	4.4		ABDGH	A	にぶい橙	100	外；ヘラケズリ・赤彩（口縁）　内；赤彩
6	臼玉	径0.53cm 厚0.35cm 孔径0.15cm 重さ0.15ｇ							滑石製

第31図　第２号古墳跡


SB1
SK5
SD1
SK7
SB1
SB1
SB1
SB1
SJ4
SJ1
SK13
SK14
H3
H4
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
L=9.40m
SB1
Hr-FA
0
8m
1:160
0
4m
1:80
1 暗褐色土 ローム粒少
2 黒褐色土 1層よりローム粒少
3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少
4 暗褐色土 ロームブロック少、ローム粒多
L=9.30m
0
2m
1:40

第32図　第２号古墳跡出土遺物



第３号古墳跡（第33図）

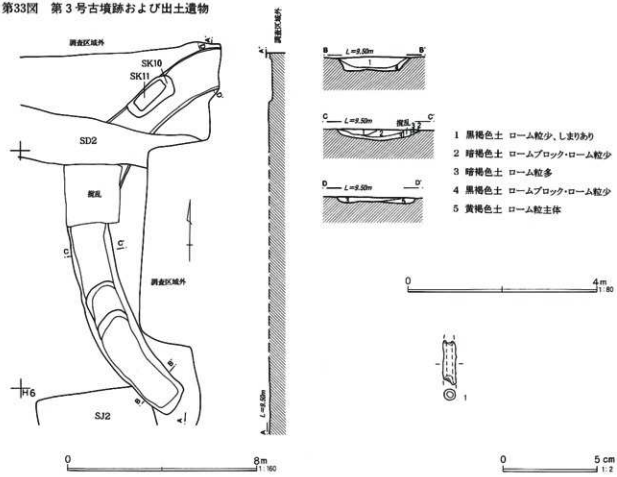
Ｆ６、Ｇ６、Ｈ６グリッドにかけて検出した古墳跡である。調査範囲内最高点からやや西側へ台地上面を下った地点に立地し、西側の標高は9.4m前後、周溝内部の標高は9.3m前後であった。確認面はハードローム対応と考えられる。

古墳時代前期の第２号竪穴住居跡、中・近世に掘削された第２号溝跡、同第10・11号土壙と重複関係にあり、覆土の平面および断面観察によって、当古墳跡が第２号竪穴住居跡に遅れ、他のものに先行すると判断できた。

古墳群中での位置関係は、西22mには第１・２号古墳跡が位置していた。第１・２号古墳跡との間は間隙となっていたが、古墳が存在した可能性は否定できない。

上層は相当の厚さで削平されたと考えられ、検出で

第33図　第３号古墳跡および出土遺物



きたのは周溝だけである。

周溝は上層の削平にも関わらず、全体の形状をよく保っていた。東側3分の2程度が調査範囲外にあたり調査できなかったが、平面形態は整った円形だったと推測できる。

周溝の南西部に陸橋部があり、想定できる中心からの方位は、N－152°－W程度であった。

周溝の断面形態は整った逆台形を基本とし、底面はほぼ平坦であった。底面のレベルは比較的一定で、陸橋部西側に深い部分がみられた。溝中土壙等の施設は検出できなかった。

周溝の規模は、想定できる内径14.0m程度、上端幅1.60～2.20m、下端幅1.20～1.80m、最深部は陸橋部西側で、深さ0.56cmであった。

周溝は覆土下層にロームブロックを含む層が流入していたが、墳丘構築材を推定できるものではなかった。

周溝覆土内からは古墳時代前期の土師器片が多く出土したが、周溝と重複する第2号住居跡のほか、近辺には削平によって消滅した同時期の住居跡が存在した可能性が高く、古墳築造（墳丘盛土・周溝掘削等）に際してこれらを破壊したために、遺物が流入したものと考えられる。

出土遺物は、周溝内覆土中層から、土製管玉が出土しているが、第3号古墳跡にともなうものであると断定することはできない。

第3号古墳跡出土遺物観察表（第33図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土製管玉	長2.3cm	径0.6cm	孔径0.35cm	重さ0.98g				両端部を欠く

第4号古墳跡（第34～36図）

A4・5、B3・4・5、C4・5グリッドにかけて検出した古墳跡である。調査範囲内最高点からやや北に下った位置に立地したもので、中央部の標高は8.7m前後であった。確認面は沖積堆積物上面となっており、地勢はやや北西に傾斜していた。

近世に掘削された第21号土壙と重複関係にあり、覆土の平面確認によって、当古墳跡が第21号土壙に先行すると判断できた。調査範囲を囲んだ防塵ネットの支柱の関係で、周溝北側の1箇所が調査できなかった。

古墳群中での位置関係は、北西4mに第7号古墳跡、南西3mに第6号古墳跡、南東5mに第5号古墳跡が隣接していた。北側4基は、第1・2・3号古墳跡からなる南側3基と10m程度の空間を挟んで2分できるが、D4・5グリッド付近には削平された古墳の存在も推測でき、群構成は明確とはいえない。

上層は相当の厚さで削平されたと考えられ、検出できたのは周溝だけである。

周溝は上層の削平にも関わらず、全体の形状をよく保っており、平面形態は非常に整った円形であった。

周溝の西部に陸橋部があり、中心からの方位はN－96°－Wであった。

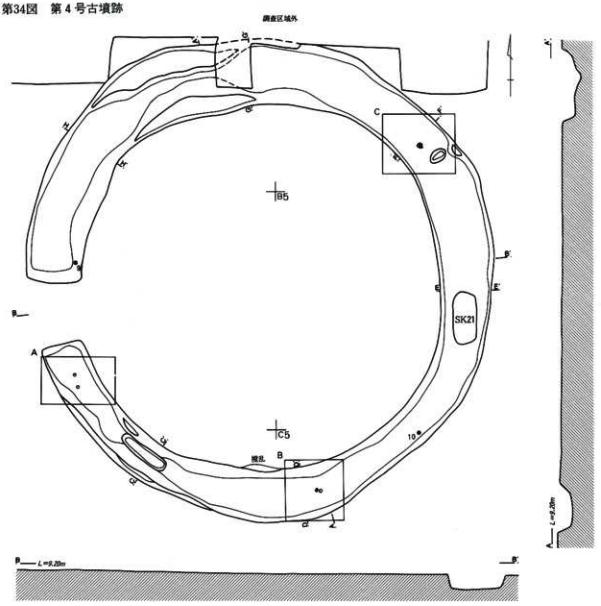
周溝の断面形態は整った逆台形もしくは長方形を基本とし、一部で中央が断面すり鉢状に深くなっていた。底面は北と東側で深かったが、ほぼ平坦であった。北東部で深いのは、地滑りや沈降などの影響も考慮する必要がある。溝中土壙等の施設は検出できなかった。

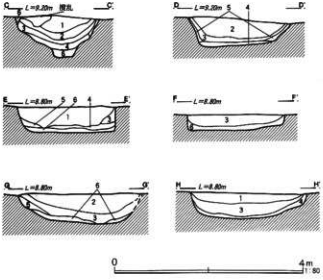
周溝の規模は、内径15.50m、上端幅1.60～2.80m、下端幅0.80～2.20m、最深部は周溝北側部分で、深さ0.68mであった。

周溝は覆土下層にロームブロックを含む5層が主に周溝内側から流入しており、墳丘構築材の土質を推測させるが、周溝壁面の崩落による可能性も低くない。火山灰層は肉眼では観察できなかった。第2号古墳跡周溝の堆積状況から考えると、火山灰を含む黒褐色土下の3・4層に、当古墳跡の1～3層が対応すると考えられ、墳丘の崩壊が一定程度進んでからHr-FAが降下した可能性がある。

周溝覆土内からは縄文時代中期後半の土器片、古墳時代前期の土師器片が多く出土したが、前者は沖積堆

第34図　第４号古墳跡





1　暗褐色土　ローム粒少、赤色粒少、黒色粒少

2　暗褐色土　1層よりローム粒多

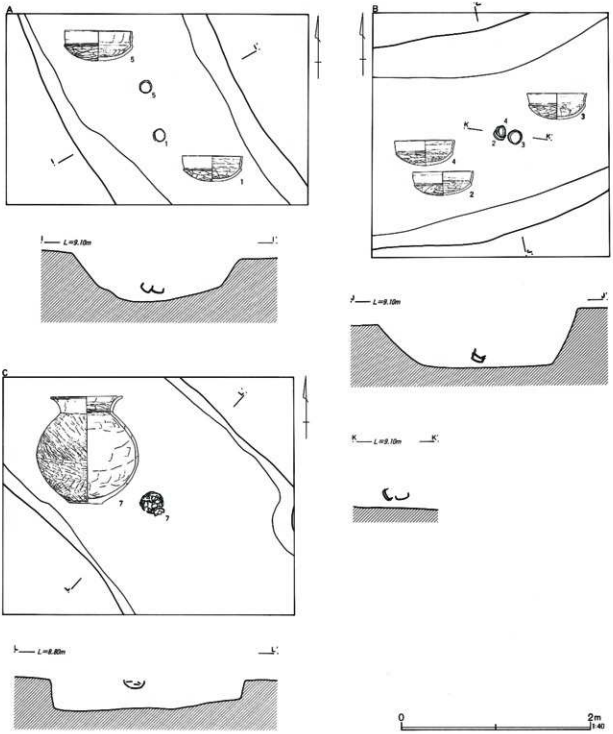
3　暗褐色土　2層より明るい暗褐色土

4　茶褐色土　ローム粒多、やや粘質

5　茶褐色土　ロームブロック・ローム粒多

6　黄褐色土　ローム粒主体

第35図　第４号古墳跡遺物出土状況



積層形成期の包含層、後者は墳丘下、もしくは近辺に存在し削平によって消滅した住居跡に基づくものと考えられる。墳丘盛土・周溝掘削等に際してこれらを破壊したために、遺物が流入したのであろう。

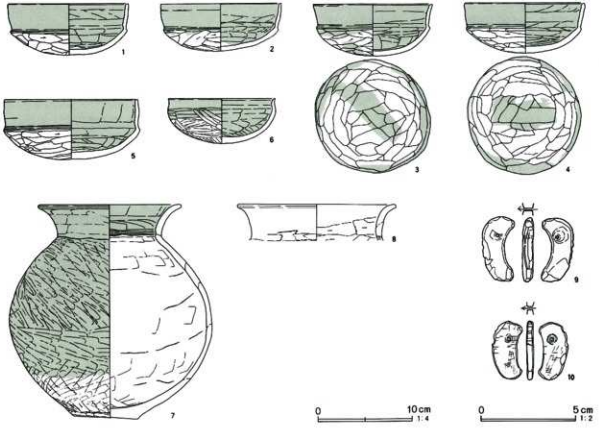
第４号古墳跡にともなう出土遺物は、陸橋部南側の周溝内に出土した完形の土師器杯２点、周溝真南部に出土した完形の土師器杯３点、周溝内北東部に出土した１個体分の土師器甕１点である。陸橋南側の２点は底面付近に正位で、周溝真南付近の３点は底面付近に正位、かつ、うち２点が重なった状態で出土した。出土層位はロームブロックを含む５層上面付近である。

陸橋部南側で出土した２点の杯（第36図１・５）

第４号古墳跡出土遺物観察表（第36図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	杯	12.7	5.4		ADGH	A	赤	100	外；ヘラケズリ後ナデ・赤彩（口縁） 内；赤彩（底部中央除く）
2	杯	12.8	4.9		ADG	A	橙	100	外；ヘラケズリ後ナデ・赤彩（口縁） 内；赤彩（底部中央除く）
3	杯	12.6	5.4		ADGH	A	赤	100	外；ヘラケズリ・赤彩（口縁・底部中央帯状） 内；赤彩
4	杯	12.7	5.3		ABDGH	A	赤	100	外；ヘラケズリ・赤彩（口縁・底部中央帯状） 内；赤彩
5	杯	14.1	6.4		ADGH	A	明赤褐	100	外；ヘラケズリ後一部ナデ・赤彩（口縁） 内；赤彩（底部中央除く）
6	杯	11.2	4.7		ADG	A	にぶい赤橙	85	外；ヘラケズリ後ナデ・赤彩（口縁）　内；赤彩
7	壺	15.2	22.5	6.6	ADGH	A	にぶい橙	75	外；ヘラケズリ後ヘラナデ・赤彩(胴下半部除く) 内；ヘラナデ・赤彩（口縁）
8	甕	(16.8)			AGH	A	にぶい黄橙	60	内外；ヘラケズリ
9	勾玉	長3.3cm　厚0.62cm　孔径0.14cm　重さ5.16g							滑石製
10	勾玉	長3.04cm　厚0.35cm　孔径0.17cm　重さ3.21g							研磨痕あり、滑石製

第36図　第４号古墳跡出土遺物



は、底部中央を除く内面と外面口縁部を丁寧に赤彩していた。周溝真南部で出土した3点の杯は、重なって出土したうちの下側にあった2が底部中央を除く内面と外面口縁部を、上側にあった4と、単独で出土した3が内面全面と外面口縁部、さらに外面底部中央付近を帯状に、いずれも丁寧に赤彩されていた。

周溝北東部の甕（第36図7）は、4層上面から3層内につぶれた状態で出土したものである。

他に北東周溝覆土中から、内面および外面口縁部が赤彩された、いわゆる比企型杯1点（第36図6）が、陸橋部北側脇と周溝内南東部で滑石製勾玉（第36図9・10）が1点ずつ出土した。

第5号古墳跡（第37図）

C6、D6グリッドにかけて検出した古墳跡である。自然堤防頂部からやや北西側へ台地上面を下った地点に立地し、西側の標高は9.1m前後、周溝内部の標高は8.8m前後であった。確認面は北側で沖積堆積層、南側でソフトロームと考えられる。

古墳時代前期の第5号竪穴住居跡と重複関係にあり、覆土の平面および断面観察によって、当古墳跡が第5号竪穴住居跡に遅れると判断できた。

古墳群中での位置関係は、北東5mに第4号古墳跡、西22mには第6号古墳跡が位置していた。第4・5・6・7号古墳跡からなる北側4基は、第1・2・3号古墳跡からなる南側3基と10m程度の空間を挟んで2分できるが、D4・5グリッド付近には削平された古墳の存在も推測できる。

上層は相当の厚さで削平されたと考えられ、検出できたのは周溝だけである。

周溝は上層の削平によって南西部上端が損なわれていたが、全体の形状は保たれていた。東側3分の2程度が調査範囲外にあたり調査できなかったが、平面形態は整った円形だったと推測できる。調査範囲内では、陸橋部は認められなかった。

周溝の断面形態はV字形に近い整った逆台形を基本としていた。幅狭く平坦な底面から、急角度で高く壁面が立ち上がっており、他の古墳跡周溝に比べ、狭く深い掘り方が顕著であった。底面のレベルは一定せず、西部で深く、南へまわると一部が段状に浅くなり、この南側で再び深く掘り込まれていた。浅い部分は、両側周溝が別々に掘り込まれたもので、陸橋部に類似した施設と考えられる。溝中土壙等の施設は検出できなかった。

周溝の規模は、想定できる内径14.50m、上端幅1.00～1.80m、下端幅0.40～1.20m、最深部は浅くなった部分の南側で深さ1.18mであった。

周溝は覆土下層にロームブロックを含む層が流入していたが、周溝外側から主に流入していた。壁面からの崩落土等と考えられる。中層には、ローム小ブロックを含む土壌が墳丘側から流入していた。墳丘構築材の流入と推定できる。いずれも流入土の自然堆積であった。

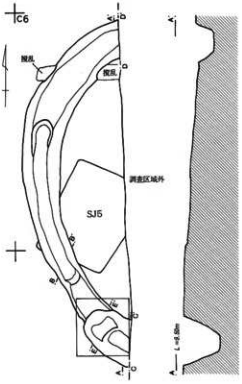
周溝覆土内からは古墳時代前期の土師器片が多く出土したが、周溝と重複する第5号竪穴住居跡のほか、隣接して検出した第6号竪穴住居跡から、古墳築造（墳丘盛土・周溝掘削等）に際した破壊等にともない、遺物が流入したものと考えられる。

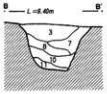
第5号古墳跡の築造に近い時期の出土遺物は、一段浅くなった部分の南端、南に急激に深く掘り込まれた部分の墳丘側上端底面から完形の第37図1の土師器杯1点が正位で出土した。自然堆積と捉えられる覆土の状況からみて、位置の移動や出土状態の乱れは考えにくく、底面付近に元来置かれていた可能性が高い。

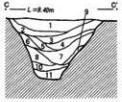
第5号古墳跡出土遺物観察表（第37図）

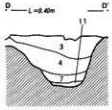
番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	杯	11.1	5.4		ADGH	A	にぶい黄橙	95	外；ヘラケズリ後ナデ・赤彩（口縁）　内；赤彩
2	杯	12.2	5.3		ADGH	A	にぶい黄橙	80	外；ヘラケズリ後ナデ・赤彩（口縁） 内；ヘラナデ・赤彩（底部中央除く）

第37図　第５号古墳跡および出土遺物



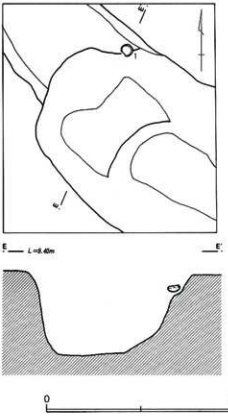


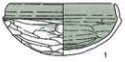




1　黒褐色土　ローム粒少
2　黒褐色土　ローム粒少
3　暗褐色土　ローム粒多
4　暗褐色土　ローム小ブロック多、ローム粒少
5　暗褐色土　ローム粒多
6　黄褐色土　ローム粒多
7　黒褐色土　ローム小ブロック・ローム粒少
8　黄褐色土　ロームブロック・ローム粒多
9　暗褐色土　ローム粒少
10　黒色土　ロームブロック・ローム粒多
11　黄褐色土　ロームブロック主体

0　4m　1:80





0　10cm　1:4

須恵器杯身模倣杯である。

他に周溝北側部分の覆土中から、破砕した土師器杯1個体分（第37図2）が出土した。復元の結果、完形となった。須恵器杯蓋模倣杯である。

いずれの杯も遺存状態がよく、杯身模倣杯の第37図1は内面底部全面と外面口縁部が、杯蓋模倣杯の2は内面底部中央を除く部分と外面口縁部が、赤彩されていた。

第6号古墳跡（第38図）

B2・3、C2・3グリッドにかけて検出した古墳跡である。調査範囲内最高点北端に立地したもので、北側には沖積堆積層が認められた。確認面の標高は、南側が9.1m程度、中央部で9.3m前後、北側で8.9m程度であった。

中・近世に掘削された第4・5号溝跡、第1・2号土壙と重複関係にあり、覆土の平面確認等によって、当古墳跡がこれらに先行すると判断できた。

古墳群中での位置関係は、北6mに第7号古墳跡、北東3mに第4号古墳跡、東22mに第5号古墳跡が隣接していた。第6号古墳跡を含む北側4基は、第1・2・3号古墳跡からなる南側3基と10m程度の空間を挟んで2分できるが、D4・5グリッド付近には削平された古墳の存在も推測できる。

上層は相当の厚さで削平されたと考えられ、検出できたのは周溝底面付近だけである。

周溝は上層の削平によって南西部分が失われていたが、本来の平面形態は整った円形だったと推測できる。調査範囲境界付近の周溝が途切れる部分では、階段状に一段浅くなっていた。付近の底面付近からは、完形の土師器杯が出土しており、周囲の古墳の状況からみて、西側に陸橋部があった可能性が指摘できる。方位はN－75°－W程度と考えられる。

周溝の断面形態は整った逆台形を基本とするが、底面は中央部に深い弧状となる部分があり、壁面の立ち上がりは垂直に近かった。掘り方は比較的厳密に感じられた。底面のレベルは西側の途切れ（陸橋か？）部分で浅くなるほかは北側半周が一定であった。しかし、南側に向かって極端に浅くなっていた。溝中土壙等の施設は検出できなかった。

周溝の規模は、内径13.50m、上端幅0.80～1.80m、下端幅0.50～1.20m、最深部は北東部分で、深さ36cmであった。

周溝は底面付近であったためか、ロームを含む覆土が堆積していたが、周溝壁面からの崩落と考えられ、墳丘構築材と推定できるものではなかった。

周溝覆土内からは古墳時代前期の土師器片が出土したが、付近には、削平によって消滅した同時期の住居跡が存在した可能性が高く、古墳築造（墳丘盛土・周溝掘削等）に際してこれらを破壊したために、遺物が流入したものと考えられる。

第6号古墳跡にともなう遺物は、陸橋部と思われる西側周溝が途切れる部分の北側底部付近で、完形の土師器杯1点（第38図1）が出土している。覆土の状況からみて、流入した形跡はなく、少量の覆土が堆積した後、正位に置かれた可能性が高い。遺存状態はきわめてよく、内面底部中央を除く部分と外面口縁部が赤彩されていた。

第6号古墳跡出土遺物観察表（第38図）

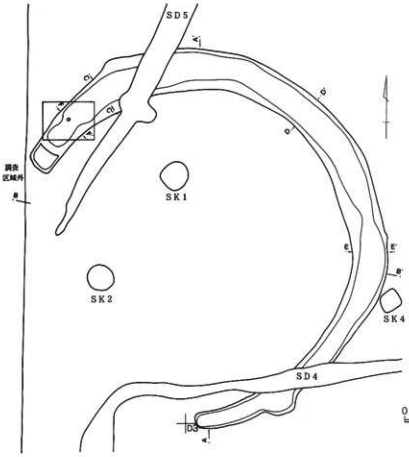
番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	杯	12.7	5.6		ADGH	A	赤褐	100	外；ヘラケズリ後ナデ・赤彩（口縁）　内；赤彩

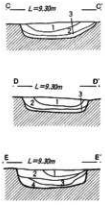
第7号古墳跡（第39図）

A2・3グリッドにかけて検出した古墳跡である。調査範囲内最高点から北側へ下った地点に立地していた。標高は周溝内外とも8.7m前後であった。確認面は沖積堆積層上面であった。

古墳時代前期の第8号竪穴住居跡、および中・近世段階に掘削された第5号溝跡と重複関係にあり、覆土の平面および断面観察によって、当古墳跡が第8号竪

第38図　第６号古墳跡および出土遺物

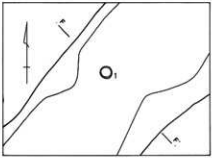


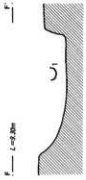


1　暗褐色土　ローム粒少、赤色粒少、黒色粒少
2　暗褐色土　1層より明るい
3　暗黄褐色土　ローム粒多
4　茶褐色土　ローム粒少、堅緻

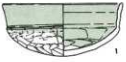
0　4m　1:80

0　8m　1:160



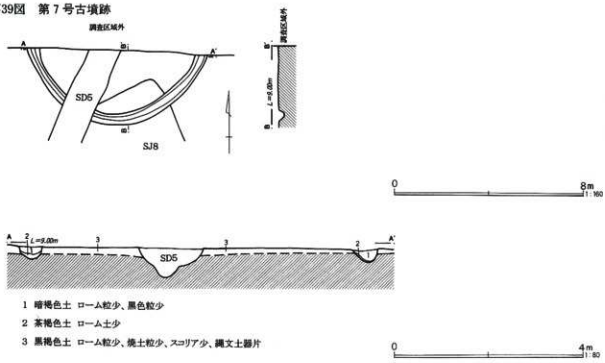


0　2m　1:40



0　10cm　1:4

第39図　第７号古墳跡



1　暗褐色土　ローム粒少、黒色粒少
2　茶褐色土　ローム土少
3　黒褐色土　ローム粒少、焼土粒少、スコリア少、縄文土器片

穴住居跡に遅れ、第５号溝跡に先行すると判断できた。

古墳群中での位置関係は、南東４ｍに第４号古墳跡、南６ｍに第６号古墳跡が隣接していた。第５号古墳跡を含む北側４基は、第１・２・３号古墳跡からなる南側３基と10ｍ程度の空間を挟んで２分できるが、Ｄ４・５グリッド付近には削平された古墳の存在も推測できる。群構成は明確ではない。

上層は一定程度の厚さで削平されたと考えられ、検出できたのは周溝だけである。

周溝は上層の削平によって損なわれていたが、全体の形状・深さともによく保たれていた。北側半分以上が調査範囲外にあたり調査できなかったが、平面形態は整った円形だったと推測できる。調査範囲内では、陸橋部は認められなかった。

周溝の断面形態は逆台形を基本としていた。幅狭く中央に深い弧状の底面から、垂直に近い角度で壁面が立ち上がっており、他の古墳跡周溝に比べ、狭く深い掘り方が顕著であった。底面のレベルはほぼ一定であったが、西側で浅くなっていた。溝中土壙等の施設は検出できなかった。

周溝の規模は、想定できる内径で7.00ｍ、上端幅0.40～0.60ｍ、下端幅0.20～0.30ｍ、最深部は西側調査区境界付近で深さ0.20ｍ程度であった。

周溝は覆土下層にロームを含む層が堆積していたが、壁面からの崩落土で、墳丘構築材を推定できるものではなかった。

周溝覆土内からは古墳時代前期の土師器片が出土したが、墳丘相当部分および周溝と重複する第８号竪穴住居跡から、古墳築造（墳丘盛土・周溝掘削等）に際した破壊等にともない、遺物が流入したものと考えられる。

第７号古墳跡の築造に近い時期の出土遺物は、検出できなかった。

(3)　埋葬施設跡

第１号埋葬施設跡（第40図）

Ａ５・６グリッドで検出した。部分的な粘土被覆をもつ埋葬施設と考えられる。調査範囲内最高点から北西方向へ下った位置に立地しており、沖積堆積層上に

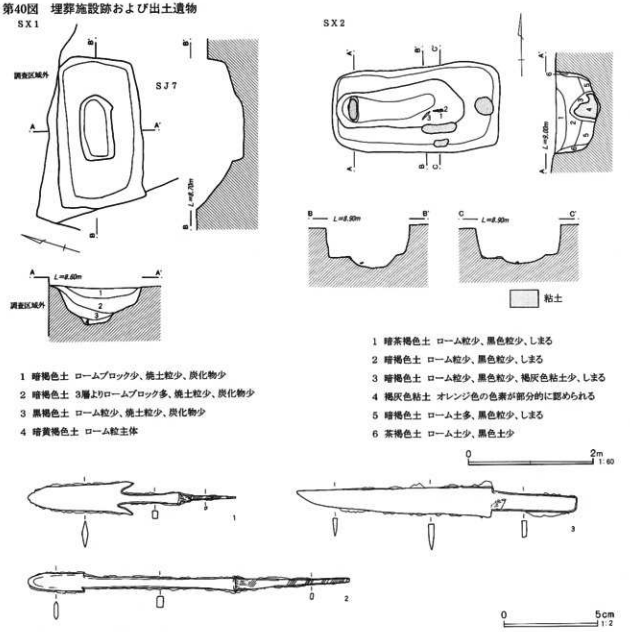
掘削されていた。確認面の標高は8.4m程度であった。

古墳時代前期の第７号住居跡と重複関係にあったが、確認面における覆土の状況からは、当施設跡の存在は確認できなかった。

当施設跡は、第７号住居跡の調査にともなって検出したもので、第７号住居跡の床面検出時に、白色粘土が出土し存在を把握することができた。このため、粘土の分布範囲などについて、詳細に観察・記録することはできず、掘り方主体の調査になった。

施設の構造は、長辺2.40m前後、短辺1.34m、深さ0.52m程度の整った長方形の上段掘り込み底面に、長辺1.02m、短辺0.50m、深さ0.12mの下段掘り込みが

第40図　埋葬施設跡および出土遺物



埋葬施設跡出土遺物観察表（第40図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	鉄鏃	長11.1cm　刃幅1.8cm　7.11g							ＳＸ２　茎部に木質
2	鉄鏃	長17.1cm　刃幅1.05cm　12.31g							ＳＸ２　茎部に木質
3	刀子	長14.9cm　幅1.6cm　厚0.3cm　22.94g							ＳＸ２　茎部に木質

設けられていた。長軸方位はN－75°－Eであった。

上段掘り込みの底面はすり鉢状で、壁面は垂直に立ちあがっていた。下段掘り込みの底面は平坦で、壁面は急傾斜で立ち上がっていた。

粘土は、小ブロックが下段掘り込みを取り巻くように上段掘り込み底面付近に分布していたが、上段掘り込み両短辺壁面から若干離れた位置に多く存在していた。

同様の遺構は、1988（昭和63）年の調査でも検出されており、刀子１本が出土している。当施設の性格は断定できないものの、今回の調査でも他に１基の部分的な粘土被覆をもつ埋葬施設と思われる遺構が検出されており、底面に粘土を敷設し、木棺小口をおさえる程度の埋葬施設跡と考えてよいだろう。こうした状況から、本書では粘土床・棚の名称を用いることを避けた。古墳群の一部をなすものとしてよいだろう。

当埋葬施設跡にともなう出土遺物はなかったが、他例から古墳時代後期の遺構と推測できる。他に、覆土中からは古墳時代前期の第７号竪穴住居跡に由来すると思われる土師器片が少量出土している。

古墳群中での位置関係は、北側の１群に入り、南西３ｍに第４号古墳跡、南14ｍに第５号古墳跡が隣接していた。第１・２・３号古墳跡からなる南側３基との間にある10ｍ程度の空間には、削平によって失われた他の埋葬施設の存在も想定できる。

第２号埋葬施設跡（第40図）

Ａ２グリッドで検出した。部分的な粘土被覆をともなう埋葬施設跡である。調査範囲内最高点から北へ下った位置に立地しており、沖積堆積層上に掘削されていた。確認面の標高は8.7ｍ程度であった。

遺構に重複関係はなかった。

施設の構造は、長辺2.66ｍ前後、短辺1.34ｍ、深さ0.46ｍ程度のやや歪んだ長方形の上段掘り込み底面に、長辺2.00ｍ、短辺0.74ｍ、深さ0.15ｍの下段掘り込みが設けられていた。長軸方位はN－89°－Eであった。

上段掘り込みは底面が平坦で、壁面は垂直、下段掘り込みはすり鉢状であった。

粘土は、上段掘り込み西側短辺から25cm程度の位置に、厚さ15cm程度の板状盛り上がりとして、下段底面付近から高さ35cmの範囲に、また、東側短辺から10cm程度の位置に塊状となってそれぞれ出土した。他に、上段掘り込み底面に、下段掘り込みを取り巻くような塊状の白色粘土の分布が認められた。

粘土の純度が高くない小ブロックは、上段掘り込み底面全体に認められたが、掘削時に除去してしまった。

直葬した木棺の小口を良質な粘土で丁寧に、周囲を粗悪な粘土混じりの土壌で粗く被覆した程度であったと考えられる。木棺の小口を中心とした被覆程度の表現にとどめたい。

第１号埋葬施設跡とともに、古墳群の一部をなすものと考えてよいだろう。

出土遺物は下段掘り込み底面付近から、鉄鏃２本と刀子１口が出土した。第40図１は短頸箆被腸抉柳葉式鉄鏃である。２は長頸棘箆被柳葉式鉄鏃である。古墳時代後期前半頃の所産であろう。

古墳群中での位置関係では北側の１群にはいり、西２ｍに第７号古墳跡、南４ｍに第６号古墳跡が隣接していた。第１・２・３号古墳跡からなる南側３基と10ｍ程度の空間には、他の遺構の存在も想定できる。

3．奈良・平安時代

(1)　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第41図）

Ｇ２、Ｈ２グリッドで検出した。２間×２間の側柱建物跡で、長軸方位はＮ－27°－Ｗであった。

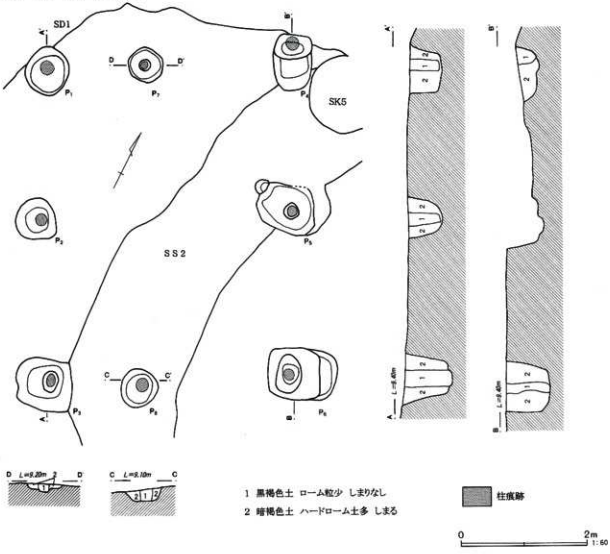
古墳時代後期の第２号古墳跡、中・近世の第１号溝跡、同第５号土壙と重複関係にあり、覆土の平面および断面観察によって、当建物跡は第２号古墳跡に遅れ、第１号溝跡、第５号土壙に先行すると判断できた。

柱穴は桁方向と思われる長辺をなす側柱穴が主に長方形平面、短辺中央のものが主に円形平面で掘られていた。柱穴の底面はいずれも平坦で、壁面は底面付近で傾斜する以外、ほぼ垂直であった。

柱穴覆土の断面観察では、柱の抜き取り痕跡はなく柱痕跡を確認することができた。柱痕跡下面は、埋設土中にとまっていたものと、掘り方底面よりも２～５cm程度低い柱当りをなしているものがみられた。柱材を打ち込んだ形跡がないため、底面下に柱当りが形成されたものについては、上屋の重みによる沈下と考えた方がよいだろう。

柱間は、桁方向と思われる長辺の側柱間で2.50m、梁方向と思われる短辺の側柱間では、Ｐ１～Ｐ７間が1.54m、Ｐ７～Ｐ４間が2.40m、Ｐ３～Ｐ８間が1.44m、Ｐ８～Ｐ６間が2.32mであった。Ｐ７・Ｐ８は、

第41図　第１号掘立柱建物跡



西側の側柱列に寄って設置されていた。間仕切り等の可能性がある。

各柱穴の規模は、Ｐ１が長径74cm、短径66cm、深さ52cm、Ｐ２が長径70cm、短径66cm、深さ52cm、Ｐ３が長辺90cm、短辺82cm、深さ76cm、Ｐ４が長辺86cm、短辺60cm、深さ36cm、Ｐ５が長径114cm、短径80cm、深さ60cm、Ｐ６が長辺110cm、短辺80cm、深さ70cm、Ｐ７が長径56cm、短径54cm、深さ14cm、Ｐ８が長径60cm、短径56cm、深さ20cmであった。

出土遺物がなかったため、年代は不明であるが、各遺構との重複関係から、古墳時代後期より遅れ、中世以前と判断でき、奈良・平安時代の構築であると考えられる。

4．中・近世

(1) 溝跡

第1号溝跡（第42・45図）

調査範囲南西部で検出した。直線的にのびるＦ２からＨ２グリッドの中央、Ｇ２グリッドで分岐し、20m程度東へのびた後、Ｇ４グリッド内で真南に向きを変えていた。総延長は約47mであった。第４号溝跡につながるが、両者の重複関係は明瞭ではなかった。

古墳時代後期の第１・２号古墳跡、古代の第１号掘立柱建物跡、中・近世の第３・７号土壙と重複関係が認められたが、覆土の平面および断面観察によって、当溝跡が第１・２号古墳跡および第１号掘立柱建物跡に遅れ、第３・７号土壙に先行すると判断できた。

掘りあがりの状態では、総延長にわたり、中央部に高まりのある２重の溝跡であったが、覆土の平面および断面観察から、重複関係を捉えることはできなかった。整然と中央の高まりが残り、掘り方に重複や破壊の痕跡はなかった。掘り直しによって、時期的に異なる２条の溝跡が重複したものとは考えにくい。

断面形態は上端が大きく広がるW字形で、Ｆ２からＨ２グリッドでは西側が、Ｇ２からＧ４グリッドでは南側が深くなっていたが、Ｇ４・Ｈ４グリッドではほとんど同じであった。

上端の幅2.10～3.40m、下端の幅約0.10～0.20m、深さ0.20～0.36m程度であった。溝底は、Ｆ２からＨ２グリッドにおける西側溝底では高低差がなく、東側溝底では高低差10cmで南から北へ傾斜していた。Ｇ２からＧ４グリッドでは、南側溝底が高低差14cmで東から西へ、北側溝底が高低差30cmで東から西へ、それぞれ傾斜していた。Ｇ４・Ｈ４グリッドでは東西の溝底ともに、高低差はほとんどなかった。

溝底に水流の痕跡はなく、平面形態からみて、何らかの区画にともなう溝跡と考えられる。

出土遺物は、天明年製の銘款のある波佐見焼染付草花文椀（第45図３）など、18世紀前半から中頃の磁器のほか、古墳時代以前のものと思われる碧玉製管玉(同図９)、13～14世紀代とみられる龍泉窯系青磁椀片(同図５・６）が出土した。他に古墳時代前期の土師器片が少量みつかっている。

流入した遺物から18世紀中頃までに掘削されたものと推定できる。

第２号溝跡（第43図）

Ｆ３からＦ６・Ｇ６グリッドにかけて、直線的に検出した。総延長は30mであった。

古墳時代後期の第１・３号古墳跡、中・近世の第12号土壙と重複関係が認められたが、覆土の平面および断面観察によって、当溝跡が第１・３号古墳跡に遅れ、第12号土壙に先行すると判断できた。

掘りあがりの状態では、東部の13m程度が、中央部に高まりのある２重の溝跡であったが、覆土の平面および断面観察から、重複関係を捉えることはできなかった。中央の高まりが南側の溝底に破壊されていたことから、時期的に異なる２条の溝跡が重複したものと考えられる。

断面形態は上端が大きく広がる偏平な逆台形で、２条となる部分では南側の溝底の方が５cm程度深くなっていた。

上端の幅0.60～1.50m、下端の幅約0.20～0.80m、深さ0.10～0.19m程度であった。溝底は、東から西へ５cm程度の高低差があった。遺構は西部ほど不明瞭で、Ｆ３グリッドの撹乱以西では確認できなかった。

溝底に水流の痕跡はなかった。

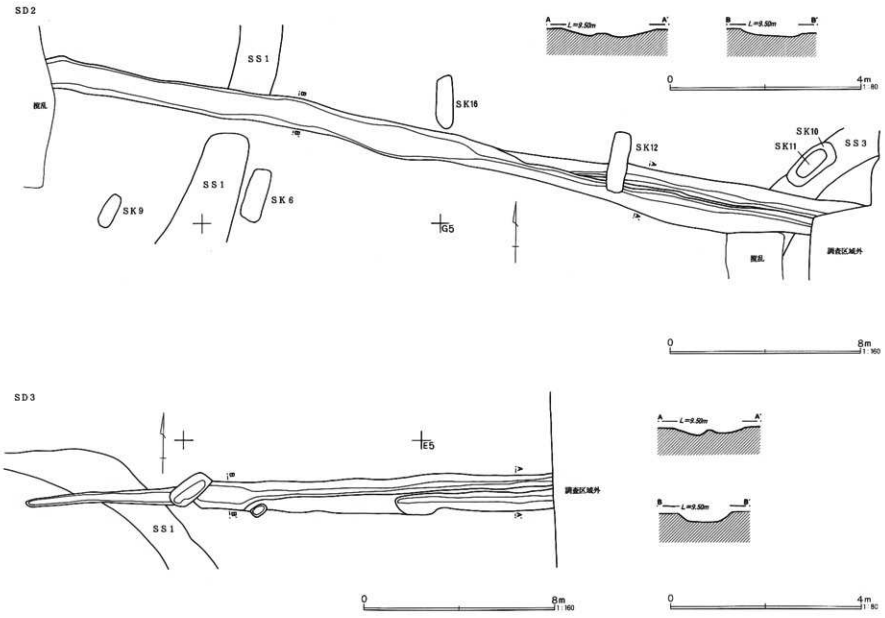
出土遺物は、近世の伊万里焼染付椀片が出土した。他に、古墳時代前期の台付甕片もみつかっている。

出土遺物、溝跡の形状からみて、第１号溝跡同様、近世前半に掘削されたと考えられる。図示できるものはなかった。

SD4
SD2
SK9
SK6
G3
SS1
SS1
SK8
SK20
調査区域外
SK5
SK7
H3
SB1
SS2
SK3
SJ4
SJ1
0
8m
1:160
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
0
4m
1:80

第42図 第1号溝跡

第13図　第2・3号溝跡


SD2
SS1
SK16
SK12
SK10
SK11
SS3
SS1
SK6
SK9
G5
撹乱
撹乱
調査区域外
A
L=8.50m
A'
B
L=8.50m
B'
0
4m
1:80
0
8m
1:160
SD3
E5
SS1
調査区域外
A
L=8.50m
A'
B
L=8.50m
B'
0
8m
1:160
0
4m
1:80

第３号溝跡（第43図）

Ｅ３からＥ５グリッドにかけて、直線的に検出した。総延長は22mであった。

古墳時代後期の第１号古墳跡と重複関係が認められたが、覆土の平面および断面観察によって、当溝跡が第１号古墳跡に遅れると判断できた。

掘りあがりの状態では、東部の6.4m程度が、中央部に高まりのある２重の溝跡であったが、覆土の平面および断面観察から、重複関係を捉えることはできなかった。中央の高まりが北側の溝底に破壊されていたことから、時期的に異なる２条の溝跡が重複したものと考えられる。

断面形態は上端が大きく広がる偏平な逆台形で、２条となる部分では南側の溝底の方が２～５cm程度深くなっていた。

上端の幅0.60～1.50m、下端の幅約0.30～1.00m、深さ0.26～0.40m程度であった。溝底は、東から西へ５cm程度の高低差があった。Ｅ３グリッド内で、上層の削平によって消滅していた。

溝底に水流の痕跡はなかった。

出土遺物は、近世の伊万里焼染付椀片、古墳時代前期の台付甕片を検出したが、図示できるものはなかった。近世前半頃の掘削と考えられる。

第４号溝跡（第44図）

調査範囲中央部で検出した。Ｆ２グリッドの攪乱際から確認され、東から西に６m細くのびた後、Ｃ２グリッドまで北にほぼ直進し、直角に近い角度で東に向きを変え、Ｃ５グリッドで第６号竪穴住居跡にぶつかるまで、緩やかに蛇行してのびていた。総延長は約62mであった。第１号溝跡と接点があるが、両者の重複関係は明瞭ではなかった。

古墳時代前期の第６号住居跡、後期の第１・６号古墳跡と重複関係が認められたが、覆土の平面および断面観察によって、当溝跡が第６号古墳跡に遅れると判断できた。また、第１号古墳跡との関係では、封土の削平後に掘削されたと考えられる。

Ｅ２・Ｆ２グリッド付近では、深く広く掘り込まれており、断面形態は整った逆台形となっていた。その他の部分では、底面が平坦で、傾斜した壁面が認められたが、本来の上端部は削平されていたと思われる。

上端の幅0.50～3.00m、下端の幅約0.30～1.50m、深さ0.10～0.87m程度であった。溝底は、Ｆ２グリッドでは高低差２cmで東から西に、Ｆ２からＣ２グリッドまでの部分では、Ｄ２グリッドに37cmの段差があり、これより南では高低差38cmで北から南に、北では高低差８cmで南から北に、Ｃ２からＣ５グリッドでは高低差15cmで西から東に、それぞれ傾斜していた。

溝底に水流の痕跡はなかった。

出土遺物は、近世の天目茶碗片１点のほか、古墳時代後期の土師器・須恵器片を少量得たが、図示できるものはなかった。

周囲の状況から、近世の掘削と思われるが、掘削時期は明確にできなかった。

第５号溝跡（第44・45図）

調査範囲北西部で検出した。Ａ３からＣ２グリッドまで、直線的にのびていた。総延長は19mであった。

古墳時代前期の第８号住居跡、後期の第６・７号古墳跡と重複関係が認められたが、覆土の平面および断面観察によって、当溝跡が両者に遅れると判断できた。

断面形態は、壁面上部が大きく緩やかに広がり、下部が垂直に近く立ち上がっていた。南部では、上層が削平され、壁面上部が失われていた。Ｃ２グリッドで消滅するのも、削平に起因すると思われる。

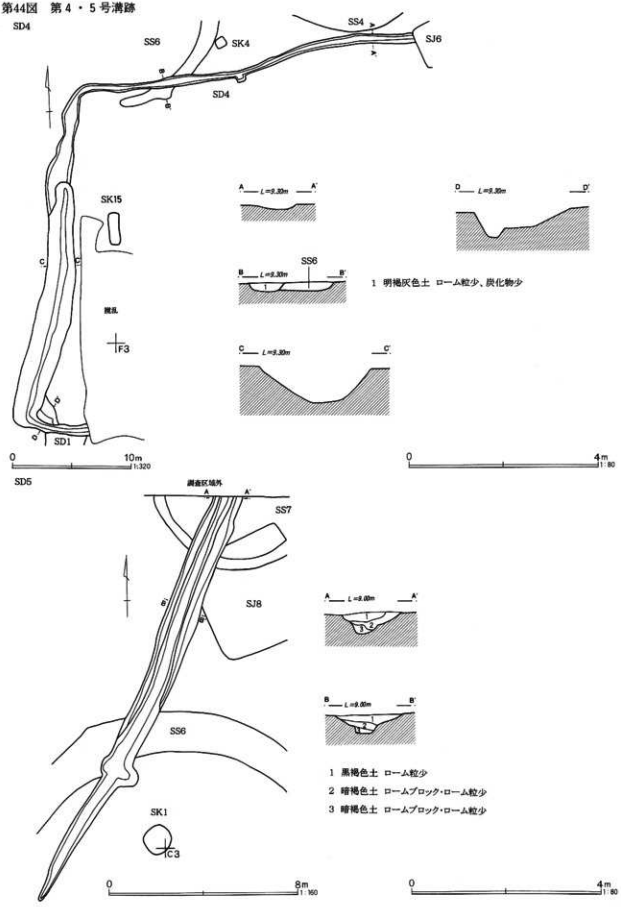
上端の幅0.30～1.45m、下端の幅約0.15～0.50m、深さ0.08～0.49m程度であった。溝底は、71cm程度の高低差で南から北へ傾斜していた。

溝底に水流の痕跡はなかった。

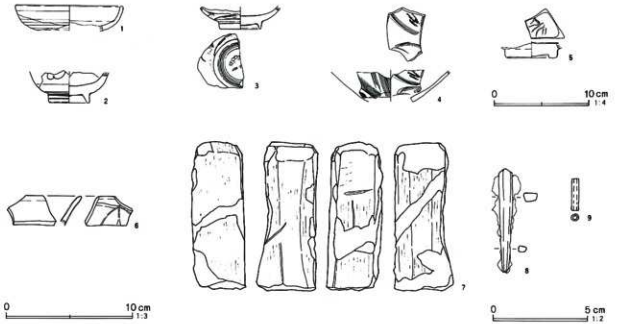
出土遺物は、中世の同安窯系青磁椀片（第44図４）のほか、古墳時代前期の土師器甕片もみつかっている。

中世以後の掘削であるが、時期の詳細は明確にできなかった。

第44図　第４・５号溝跡


SD4
SS6
SK4
SS4
SJ6
SD4
SK15
撹乱
F3
SD1
SS6
1　明褐灰色土　ローム粒少、炭化物少
0
10m
1:320
0
4m
1:80
SD5
調査区域外
SS7
SJ8
SS6
SK1
C3
1　黒褐色土　ローム粒少
2　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒少
3　暗褐色土　ロームブロック・ローム粒少
0
8m
1:160
0
4m
1:80

第45図　溝跡出土遺物



溝跡出土遺物観察表（第45図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	陶器小皿	(11.5)			GF	A	灰黄	20	SD1　外；ケズリ　灰釉　瀬戸焼
2	磁器椀				G	A	明緑灰	20	SD1　染付　草花文　伊万里焼
3	磁器椀				G	A	白	40	SD1　染付　草花文　波佐見焼 高台内に銘款「天明年製」
4	青磁椀				G	A	灰白		SD5　同安窯系
5	青磁皿	5.4	0.9		G	A	灰白	25	SD1　龍泉窯系　中央に花文
6	青磁椀				G	A	灰白		SD1　龍泉窯系　外面に蓮弁文
7	砥石	長7.7cm　幅2.7cm　厚3.3cm　重さ109.64g							SD1　砂岩
8	玉	長5.45cm　幅0.7cm　厚0.42cm　重さ5.06g							SD1　刀子か
9	管玉	長1.7cm　径0.4cm　孔径0.2cm　重さ0.49g							SD1　滑石製

5．その他

(1) 土壙

今回の調査では22基の土壙を検出することができた。検出した土壙は、深さ・平面形・長軸方位などから6つのグループに分けることができる。

第1のグループは、浅い楕円形平面の土壙で、方位に明確な規則性が認められないものである。第9・17・19号土壙がこれにあたる。

第2のグループは、長辺と短辺の比率が低い長方形、もしくは方形の浅い土壙で、方位に明確な規則性が認められないものである。第3・4・13・22号土壙がこれにあたる。

第3のグループは、いずれにも属さないもので、削平によって溝跡底面だけが遺ったものの可能性もある。第18号土壙がこれにあたる。

第4のグループは、円形平面の浅い土壙である。第1・14号土壙がこれにあたる。

第5のグループは、円形平面の著しく深い縦坑で、井戸跡と思われるものである。調査時点で土壙に分類しており、保存記録類が煩雑になるため、本書でも土壙の名称で扱った。第2・5号土壙がこれにあたる。

第6のグループは、しっかりした掘り方の長い長方形平面をした土壙である。長辺の方位を南北とするものが多い。少数ながら方位に斜行するものもある。第6・7・8・10・11・12・15・16・20・21号土壙がこれにあたる。形状・方位からみる限り、墓壙の可能性があり、「土壙」の名称に合致すると思われるものである。

各遺構の説明については遺構番号順とし、煩雑にならないようにしたが、遺構図については、レイアウト上の便宜をはかるため、グループ毎とした。

第1号土壙（第46図）

B2、C2グリッドで検出した。平面形はほぼ正円形で、径114cm程度、深さ14cmであった。底面は平坦で、壁面はほぼ直立していた。覆土は暗褐色土を主体とし、地山のローム層起源のロームブロックを含んでいた。出土遺物は、古墳時代前期に属する甕片等4片があったが、図示できるものはなかった。

第6号古墳跡墳丘相当位置にあたるが、重複関係は不明である。掘削された時期は、明確にできなかった。

第2号土壙（第46図）

C2グリッドで検出した。井戸跡と思われる。平面形はほぼ正円形で、径120cm前後であった。安全基準を越えるため底面まで調査することができず、深さは計測できなかった。壁面はほぼ直立していたが、部分的に崩落のためオーバーハングしていた。覆土は暗褐色土を主体としていた。出土遺物は、古墳時代前期に属する甕胴部片等14片があったが、図示できるものはなかった。

第6号古墳跡墳丘相当位置にあたるが、重複関係は不明である。掘削された時期は、明確にできなかった。

第3号土壙（第46図）

H4グリッドで検出した。平面形は長方形で長辺110cm、短辺62cm、深さ14cmであった。長軸方位はN－79°－Eであった。底面はほぼ平坦であったが、東側が10cmほど低くなっていた。壁面は急に立ち上がっていた。出土遺物は、古墳時代前期に属する赤彩された小形壺・高杯・甕各1片があったが、図示できるものはなかった。第1号溝跡と重複関係にあり、覆土の平面観察から、当土壙が、第1号溝跡に遅れるものと判断できた。近世に掘削されたものであろう。

第4号土壙（第46・48図）

C3グリッドで検出した。平面形は方形で、74×86cm、深さ60cmであった。底面は平坦で、壁面はほぼ直立していた。覆土は暗褐色土を主体とし、炭化物を含んでいた。出土遺物は、古墳時代前期に属する赤彩された小形壺・高杯・甕等4片があったが、図示できたのは第48図3の二重口縁壺口縁部のみである。掘削さ

れた時期は不明である。

第5号土壙（第46図）

Ｇ２グリッドで検出した。井戸跡と思われる。平面形はほぼ正円形、径120cm程度、深さ170cmであった。底面は平坦で、壁面はほぼ直立していた。覆土は暗褐色土を主体とし、地山が崩壊したロームブロック等を含んでいた。出土遺物は、古墳時代前期に属する赤彩された小形壺・高杯、甕等15片があったが、図示できるものはなかった。古墳時代後期の第２号古墳跡と重複関係にあり、覆土の断面観察から、当土壙が第２号古墳跡に遅れることがわかった。確認面付近の覆土は、ロームブロックを含む埋め戻し土とみられ、周溝が完全に埋没した後、掘削され埋め戻されたものと考えられる。掘削時期は明確にできなかった。

第6号土壙（第47図）

Ｆ４グリッドで検出した。平面形は不整な隅丸長方形で、長辺220cm、短辺84cm、深さ20cmであった。長軸方位はＮ－18°－Ｅであった。底面は平坦で、壁面はやや傾斜していた。覆土は暗褐色土を主体とし、地山のローム層起源のローム粒を含んでいた。出土遺物は、古墳時代後期の土師器甕片２片があったが、図示できなかった。掘削時期は明確にできなかった。

第7号土壙（第47図）

Ｇ３・Ｈ３グリッドで検出した。平面形は長方形で、長辺260cm、短辺84cm、深さ14cmであった。長軸方位はＮ－11°－Ｅであった。底面はほぼ平坦で、壁面は傾斜していた。覆土は暗黄褐色土を主体とし、地山のローム層起源のロームブロック・ローム粒を多量に含んでいた。出土遺物は、古墳時代後期の土師器甕片27片があったが、図示できるものはなかった。第１号溝跡と重複関係にあり、覆土の平面観察から、当土壙が、第１号溝跡に遅れるものと判断できたが、調査段階で、同時に掘削作業を行ったため、第１号溝跡内部の上端は破損してしまった。近世に掘削されたものであろう。

第8号土壙（第47図）

Ｇ３グリッドで検出した。確認時の平面形には不整な部分があったが、下端をみる限り、掘削時には長方形であったと思われる。長辺240cm、短辺110cm程度、深さ42cm、長軸方位はＮ－58°－Ｅであった。底面は平坦で、壁面は急傾斜で立ち上がっていた。覆土は暗褐色土を主体とし、地山のローム層起源のローム粒を含み、下層にはロームブロックが目立った。出土遺物は、古墳時代に属する土師器小形壺片１片があったが、図示できなかった。掘削時期は明確にできなかった。

第9号土壙（第46図）

Ｆ３グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径150cm、短径56cm、深さ８cmであった。長軸方位はＮ－27°－Ｅであった。底面は平坦で、壁面は傾斜していた。覆土は暗褐色土を主体とし、地山のローム層起源のローム粒を含んでいた。出土遺物は、古墳時代後期に属する土師器甕片４片があったが、図示できなかった。古墳時代後期の第１号古墳跡墳丘相当位置にあたるが、削平のため、重複関係は明確にできなかった。掘削時期は不明である。

第10号土壙（第47・48図）

Ｆ６グリッドで検出した。平面形は長方形で、長辺220cm、短辺92cm、深さ20cmであった。長軸方位はＮ－50°－Ｅであった。底面は平坦で、壁面はほぼ直立していた。覆土は暗褐色土を主体としていた。出土遺物は、古墳時代前期に属する土師器台付甕・高杯片23片があった。図示できたのは、第48図１・２の２点である。２に示した口縁部に明瞭な輪積み痕をのこし、指ナデする甕が特徴的であるが、いずれも当土壙に本来的にともなうものではない。古墳時代後期の第３号古墳跡と重複しており、覆土の平面観察から、当土壙が第３号古墳跡周溝埋没後掘削されたものであると判断できた。また、中央には第11号土壙が掘り込まれていたが、覆土の平面観察から、第11号土壙が遅れて掘削されたと判断できた。

第11号土壙（第47図）

Ｆ６グリッドで検出した。平面形は非常に整った長方形で、長辺150cm、短辺54cm、深さ44cmであった。長軸方位はＮ－47°－Ｅであった。底面は平坦で、壁面は直立していた。覆土は暗褐色土を主体としていた。出土遺物は、古墳時代前期に属する土師器甕・壺片４片等があったが、図示できなかった。古墳時代後期の第３号古墳跡、ほかに第10号土壙と重複しており、覆土の平面観察から、当土壙が両者に遅れると判断できた。

第12号土壙（第47図）

Ｆ５グリッドで検出した。平面形は長方形で、長辺260cm、短辺80cm、深さ34cmであった。長軸方位はＮ－11°－Ｅであった。底面は平坦で、壁面は直立していた。覆土は暗褐色土を主体としていた。出土遺物はなかった。第２号溝跡と重複関係にあり、覆土の平面観察から、当土壙が第２号溝跡に遅れるものと判断できた。近世前半以後の掘削であろう。

第13号土壙（第46図）

Ｈ３グリッドで検出した。平面形は長短比の小さい長方形で、長辺112cm、短辺70cm、深さ20cmであった。長軸方位はＮ－88°－Ｗであった。底面は中央が平坦であったが、周辺にすり鉢状となっていた。壁面は傾斜していた。覆土は暗灰褐色土を主体とし、地山起源のロームブロック・ローム粒を含んでいた。埋め戻された可能性もある。出土遺物は、古墳時代後期の土師器甕片のほか、近世陶器片等、計20片程度があったが、図示できなかった。近世以後に掘削されたと考えられる。

古墳時代後期の第２号古墳跡墳丘相当位置にあったが、第２号古墳跡墳丘崩壊過程との関係は把握できなかった。また、第14号土壙と重複関係にあり、覆土の平面観察から、当土壙が第14号土壙に遅れるものと判断できた。

第14号土壙（第46図）

Ｈ３グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、径130cm程度、深さ27cmであった。底面はすり鉢状であった。覆土は上中層に焼土を含むことを特徴とし、下層はロームを主体としていた。出土遺物はなかった。

古墳時代後期の第２号古墳跡墳丘相当位置にあったが、第２号古墳跡墳丘崩壊過程との関係は把握できなかった。また、近世の第13号土壙と重複関係にあり、覆土の平面観察から、当土壙が第13号土壙に先行すると判断できた。掘削時期は明確にできなかった。

第15号土壙（第47図）

Ｄ２・３、Ｅ２・３グリッドで検出した。平面形は非常に整った長方形で、長辺250cm、短辺80cm、深さ26cmであった。長軸方位はＮ－４°－Ｗであった。底面は中央が若干深いもののほぼ平坦で、壁面は直立していた。覆土は暗褐色土を主体としていた。出土遺物はなかった。

古墳時代後期の第１号古墳跡周溝と重複関係にあり、覆土の平面観察から、当土壙が第１号古墳跡周溝に遅れるものと判断できた。掘削時期は明確にできなかった。

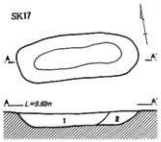
第16号土壙（第47図）

Ｆ４・５グリッドで検出した。平面形は上端が部分的に歪んだ長方形で、長辺218cm、短辺80cm、深さ12cmであった。長軸方位はＮ－６°－Ｗであった。底面はほぼ平坦で、壁面は傾斜していた。覆土は下層に地山起源のローム粒を含んでいたが、上層はロームブロックを含む黒褐色土で、埋め戻した形跡があった。出土遺物は、古墳時代前期の土師器甕・壺等９片があったが、図示できなかった。いずれも小片で、削平された古墳時代前期の遺構からの流入品と考えられる。掘削時期は明確にできなかった。

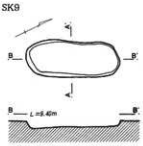
第17号土壙（第46図）

Ｆ４・５グリッドで検出した。平面形は不整な楕円

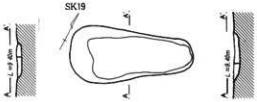
第46図　土壙(1)



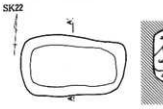
1 暗褐色土 ロームブロック多
2 黒褐色土 ローム粒多



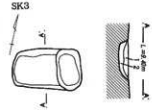
1 暗褐色土 ローム粒少



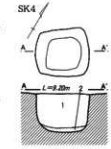
1 黒褐色土 ロームブロック少



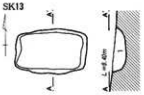
1 暗褐色土 ローム粒少
2 暗褐色土 ローム粒少
3 黒褐色土 ローム粒少
4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多



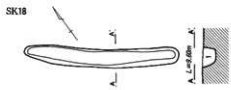
1 黒褐色土 ローム粒少
2 黒褐色土 ローム土多



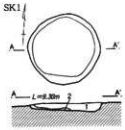
1 暗褐色土 ローム粒少、炭化物少
2 暗黄褐色土 ローム土主体



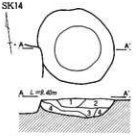
1 暗灰褐色土 ロームブロック少
ローム粒少



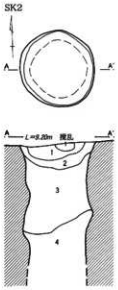
1 黒褐色土 ロームブロック少

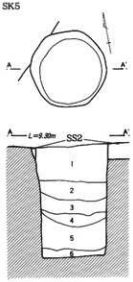


1 暗褐色土 ロームブロック少
黒色粒少
2 黄褐色土 ローム土



1 暗褐色土 焼土粒多
2 暗褐色土 ローム粒多
3 黒褐色土 ローム粒少
焼土粒少、炭化物少
4 暗黄褐色土 ローム土主体





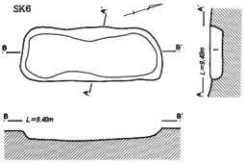
SK2
1 茶褐色土 ローム土多
2 明褐色土 ローム土多
3 暗褐色土 ローム粒少、黒色粒少
4 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒多

SK5
1 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少
2 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒少、暗褐色土ブロック少
3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少
4 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒少、暗褐色土ブロック少
5 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少
6 黄褐色土 ロームブロック・ローム粒少

0　2m
1:60

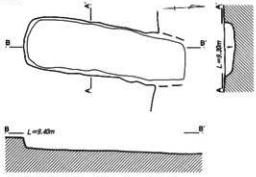
第47図　土壙(2)

SK6



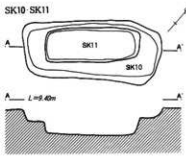
1　暗褐色土　ローム粒少

SK7

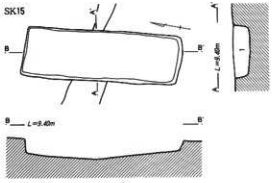


1　暗黄褐色土　ロームブロック・ローム粒多

SK10·SK11

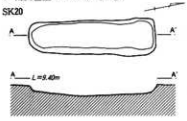


SK15

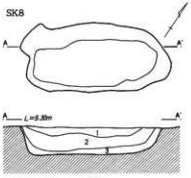


1　褐灰色土　ロームブロック多

SK20



SK8

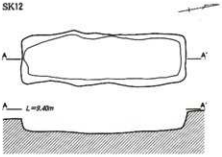


1　暗褐色土　ローム粒少

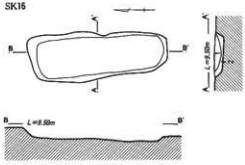
2　暗褐色土　ローム粒多

3　暗褐色土　暗褐色ロームブロック多

SK12



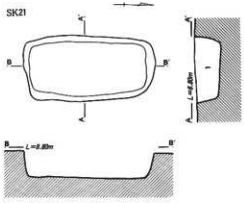
SK16



1　黒褐色土　ロームブロック少

2　暗褐色土　ローム土多

SK21



1　暗灰褐色土　ローム粒少、灰褐色土少

0　2m
1:60

形で、長径194cm、短径70cm、深さ24cmであった。長軸方位はN－87°－Wであった。底面は中央が平坦で、周囲にすり鉢状となっていた。覆土は上層にロームブロックを多く含み、下層に黒褐色土が堆積していた。埋め戻された可能性もある。出土遺物は古墳時代前期の土師器甕・壺等4片があったが、図示できなかった。いずれも小片で、削平された古墳時代前期の遺構からの流入品と考えられる。掘削時期は明確にできなかった。

第18号土壙（第46図）

Ｅ５グリッドで検出した。平面形は不整な溝状の長楕円形で、長径248cm、短径28cm、深さ16cmであった。長軸方位はN－54°－Wであった。底面は平坦で、壁面は急角度に立ち上がっていた。覆土は黒褐色土を主体としていた。出土遺物はなかった。掘削時期は明確にできなかった。溝跡底面痕跡の可能性が高い。

第19号土壙（第46図）

Ｄ５グリッドで検出した。平面形は西側に広い不整な楕円形で、長軸方向196cm、短軸方向76cm、深さ10cmであった。長軸方位はN－64°－Eであった。底面は平坦で、壁面は傾斜していた。覆土はロームブロックを含む黒褐色土を主体としていた。出土遺物は古墳時代前期の土師器甕等２片があったが、図示できなかった。いずれも細片であり、流入したものと考えられる。掘削時期は明確にできなかった。

第20号土壙（第47・48図）

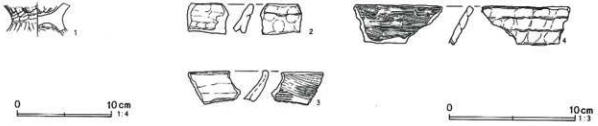
Ｇ４グリッドで検出した。平面形は隅丸の長方形で、長辺202cm、短辺54cm、深さ16cmであった。長軸方位はN－９°－Eであった。底面は中央が深くなるもののほぼ平坦で、壁面は傾斜していた。覆土は暗褐色土を主体としていた。出土遺物は古墳時代前期の土師器台付甕等10片があった。図示できたのは第48図４だけで、輪積み痕が明瞭に残り、指ナデを施した甕口縁部片である。出土遺物はいずれも細片で、流入したものと考えられる。掘削時期は明確にできなかった。

第21号土壙（第47図）

Ｂ５グリッドで検出した。平面形は長方形で、長辺210cm、短辺102cm、深さ58cmであった。長軸方位はN－Sであった。底面は平坦で、壁面は直立していた。覆土は暗灰褐色土であった。出土遺物は古墳時代前期の土師器台付甕・古墳時代後期の土師器甕・平安時代の須恵器杯等18片があったが、図示できるものはなかった。

古墳時代後期の第４号古墳跡周溝と重複関係にあり、

第48図　土壙出土遺物



土壙出土遺物観察表（第48図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	台付甕			5.3	AGH	A	にぶい黄褐	75	SK10　外：ハケ後板ナデ　内：ヘラナデ
2	壺				AGH	A	にぶい橙		SK10　外：板ナデ後指ナデ　内：細ヘラナデ
3	壺				AGH	A	にぶい黄橙		SK４　外：ハケ　内：板ナデ
4	甕				ADG	A	にぶい黄橙		SK20　外：指ナデ　内：細ハケ

覆土の平面観察から、当土壙が遅れるものと判断できた。

出土遺物はいずれも細片であり、流入したものと考えられる。少なくとも平安時代以後の掘削である。

第22号土壙（第46図）

Ｃ５グリッドで検出した。平面形は隅丸長方形に近い楕円形で、長径164cm、短径96cm、深さ38cmであった。長軸方位はＮ－90°－Ｅであった。底面は平坦で、壁面は急傾斜で立ち上がっていた。覆土は上層に暗褐色土、壁際に地山起源のローム土体の土壙が堆積していた。自然堆積であろう。出土遺物は古墳時代の土師器甕片４片があったが、図示できるものはなかった。いずれも細片であり、流入したものと考えられる。掘削時期を明確にすることはできなかった。

(2) ピット

調査範囲内では、意図が不明瞭な小形の掘り込みながら、人為的に掘削されたと思われる遺構が複数検出された。本書ではこれらをピットとした。

ピットは主に、古墳時代前期の住居跡が多く分布する地域で検出された。Ｇ６グリッドに密集していたＰ１～Ｐ５では、長方形や楕円形の土壙状の掘り込みを含んでおり、特にＰ２では古墳時代前期の土器を出土し上層に焼土が含まれるなど、住居跡内の諸施設や屋外の付属施設の在り方に類似した状況がみられた。上層の削平状況や、第２・３号住居跡の遺存状態を考慮すると、周囲の浅いピット（Ｐ３～５）についても貼床下の掘り方等である可能性を考慮しておく必要がある。

Ｈ４グリッドでみつかったピット（Ｐ６・Ｐ７）も、第１号住居跡に近接しており、第４号住居跡の例からみて、住居跡にともなう施設であった可能性を指摘しておきたい。しかし、各遺構の明確な機能を明らかにすることはできなかった。

Ｐ１（第49図）

Ｇ６グリッドで検出した。Ｐ１～Ｐ５とともに密集していた。整った長方形で、長辺46cm、短辺32cm、深さ43cmであった。長軸方位はＮ－49°－Ｗであった。底面は平坦で、壁面はほぼ直立していた。覆土はローム粒を含む暗褐色土の自然堆積であった。出土遺物は、古墳時代前期に属する土師器高杯と思われるもの１点（第49図Ｐ１－１）、器台１点（第49図Ｐ１－２）があった。流入した可能性もあるが、形状や、隣接して検出した複数のピットのうち、Ｐ２でも同時期の土師器台付甕が検出されたこと、上部を削平された状態の第２・３号住居跡が近辺に存在したことなどからみて、上部を削平された古墳時代前期の住居跡に属する施設の可能性がある。

Ｐ２（第49図）

Ｇ６グリッドで検出した。Ｐ１～Ｐ５とともに密集していた。平面形は歪んだ楕円形で、長径52cm、短径36cm、深さ23cmであった。長軸方位はＮ－38°－Ｗであった。底面は平坦で、壁面は急傾斜で立ち上がっていた。覆土は上層に焼土を含み、下層に壁面の地山を起源とするローム粒が混入していた。出土遺物は２層中から、第49図Ｐ２－１に示した古墳時代前期の土師器台付甕脚部１点が得られた。流入した可能性もあるが、覆土中の焼土の存在や、Ｐ１との位置関係、上部を削平された状態の第２・３号竪穴住居跡が近辺に存在したことなどからみて、上部を削平された古墳時代前期の住居跡に属する貯蔵穴等の可能性がある。

Ｐ３（第49図）

Ｇ６グリッドで検出した。Ｐ１～Ｐ５とともに密集していた。平面形はほぼ円形で、径35～38cm、深さ12cmであった。底面は、中央が平坦で周囲がすり鉢状になっていた。壁面は傾斜していた。覆土は褐色土を主体とし、地山のローム層起源のローム粒を含んでいた。

出土遺物は古墳時代の土師器甕片４片があったが、図示できるものはなかった。掘削時期を明確にすることはできなかった。

Ｐ４（第49図）

Ｇ６グリッドで検出した。Ｐ１～Ｐ５とともに密集していた。平面形はほぼ円形で、径33～36cm、深さ18cmであった。底面は、中央が窪むすり鉢状であった。覆土はローム粒を多く含んでいた。出土遺物はなかった。掘削時期を明確にすることはできなかった。

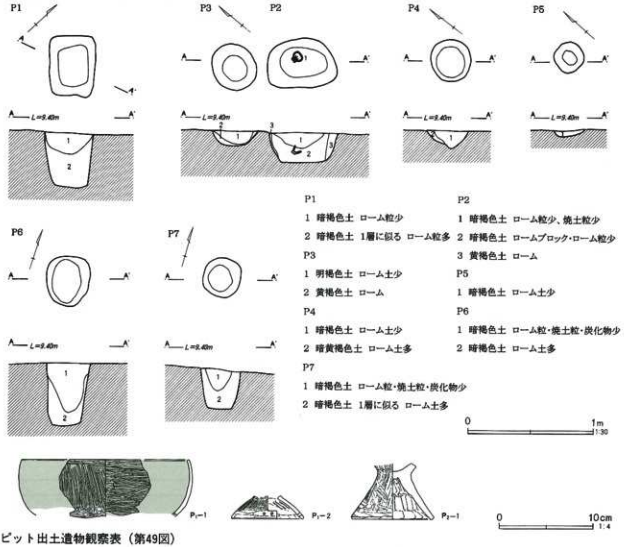
Ｐ５（第49図）

Ｇ６グリッドで検出した。Ｐ１～Ｐ４とともに密集していた。平面形はほぼ円形で、径23cm程度、深さ５cmであった。底面はすり鉢状であった。覆土はローム粒を含む暗褐色土であった。出土遺物はなかった。掘削時期を明確にすることはできなかった。

Ｐ６（第49図）

Ｈ４グリッドで検出した。平面形は歪んだ楕円形で、径37cm程度、深さ49cmであった。底面は平坦で、壁面

第49図　ピットおよび出土遺物



ピット出土遺物観察表（第49図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
P1-1	高杯	(17.8)			AGH	A	にぶい黄橙	25	外；ミガキ・赤彩(体部上半)　内；ミガキ・赤彩
P1-2	脚			(7.7)	ADGH	A	にぶい黄橙	35	外；ハケ・板ナデ　内；板ナデ　焼成前穿孔
P2-1	脚			(8.8)	AG	A	にぶい黄橙	100	外；細板ナデ　内；板ナデ

はほぼ直立していた。覆土は上層が炭化物・焼土を含む暗褐色土、下層が地山起源のローム主体の土壌であった。上層は、柱材の焼却と腐食によって形成された可能性がある。柱穴と思われる。

出土遺物はなかった。掘削時期を明確にすることはできなかった。

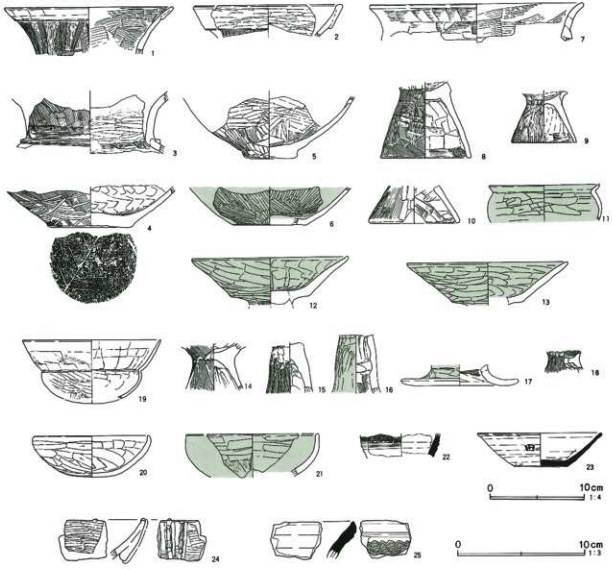
P7（第49図）

H4グリッドで検出した。平面形は円形で、径30cm程度、深さ32cmであった。底面は平坦で、壁面ははぼ直立していた。覆土は上層が炭化物・焼土を含む暗褐色土、下層が地山起源のローム主体の土壌であった。上層は、柱材の焼却と腐食によって形成された可能性がある。柱穴と思われる。出土遺物はなかった。掘削時期を明確にすることはできなかった。

(3) グリッド出土遺物

古墳時代後期の古墳跡、中・近世段階の溝跡、土壙等の覆土中からは、古墳時代前期から中期の遺物が多く出土した。調査範囲内では、台地性のローム層上部に至る深い削平があったと考えられ、最高点付近の遺構が多数失われた可能性がある。また、古墳時代前期あるいは中期の遺構の破壊は、古墳築造時にも行われ

第50図　グリッド出土遺物



たと思われる。古墳時代後期以後の遺構内で出土した遺物は、人為的移動や自然の営力による長距離の移動を受けた可能性は低く、消滅してしまったが、元来属した遺構や遺棄された位置付近に出土した可能性がある。ここでは、出土遺物のうち、出土位置のわかる遺物を中心に資料化しておく。

竪穴住居跡と同時期で古墳時代前期の遺物が多くを占めるが、第50図12・13・16に示した高杯や須恵器把手付コップ形椀もしくは直口系の壺片と思われる22のように、中期の遺物も混入していた。中期の遺構は検出できなかったが、遺物に顕著な風化を受けたものはなく、高杯の赤彩に用いた化粧土もよく保たれていたこと、西側隣接地で中期から後期初頭頃の竪穴住居跡が検出されていること等からみて、削平された遺構の存在が推定できる。周辺における今後の調査で確認する事項のひとつである。

なお、第1号古墳跡周溝内では、平安時代の須恵器杯1点が完形で出土した(第50図23)。体部には、墨書で「田」とある。古代の遺構は掘立柱建物跡1棟しか検出できなかったが、南側200m程度の位置で、昭和59年に奈良時代以後の竪穴住居跡1軒が検出されており、古墳時代同様、削平によって失われた遺構の存在が想定できる。あるいは、時期不明の土壙のうちには、当該時期に掘削されたものがあるかもしれない。

グリッド出土遺物観察表（第50図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	備　考
1	壺	(17.9)			ADG	A	にぶい黄褐	25	SS7周溝　外；粗ハケ後細ハケ　内；粗ハケ
2	壺	15.8			AGH	A	にぶい橙		SS1周溝　内外；板ナデ　外頸部；ハケ
3	壺				AGH	A	にぶい黄褐	15	SS5周溝　外；ハケ後細ハケ　内；ミガキ
4	底部			9.1	ADGH	A	にぶい黄褐	40	SS6周溝　外；ハケ後粗ミガキ　内；板ナデ 底；木葉痕
5	底部			5.7	ADGH	A	褐	50	SX1覆土　外；ハケ後板ナデ　内；板ナデ
6	底部			(7.6)	AGH	A	にぶい赤褐	20	SS3周溝　内外；ミガキ・赤彩
7	甕	(22.6)			ADG	A	にぶい黄褐		SX1覆土　内外；ハケ
8	台付甕		8.0	9.6	ADGH	A	にぶい橙	75	SS1周溝　外；ハケ後ナデ　内；ハケ後板ナデ
9	台付甕		5.1	6.9	AGH	A	明赤褐	100	SS1周溝　外；ハケ後ナデ　内；ハケ後ナデ
10	台付甕			9.6	AGH	A	にぶい黄橙	25	SS5周溝　外；ハケ後ミガキ　内；板ナデ
11	鉢	(11.7)			AGH	A	にぶい赤褐	15	SS4周溝　外；ヘラケズリor強いヘラナデ・赤彩　内；ヘラナデ・赤彩
12	高杯	16.6			AGH	A	にぶい赤褐	60	SS4周溝　外；身ナデ・脚ハケ後ナデ・赤彩 内；ヘラナデ後赤彩
13	高杯	(17.1)			ADGH	A	にぶい赤褐	40	SS4周溝　外；身ナデ・脚ハケ後ナデ・赤彩 内；ヘラナデ後赤彩
14	高杯				AGH	A	にぶい褐	60	SS4周溝　外；ハケ後粗ミガキ　内；ヘラナデ
15	高杯				AGH	A	にぶい橙	75	SS1周溝　外；ヘラケズリ後細ハケ　内；細ハケ・板ナデ
16	高杯				ADGH	A	にぶい赤褐	40	SS4周溝　外；ヘラケズリ後ヘラナデ・赤彩 内；細ハケナデ
17	高杯			(12.4)	ADGH	A	赤褐	30	SS4周溝　外；ヘラナデ・赤彩　内；細ハケ・板ナデ
18	器台				AGH	A	明赤褐	80	SS1周溝　外；板ナデ後ミガキ・赤彩　孔径0.85cm　内；ミガキ・板ナデ・赤彩
19	小形壺	(14.7)			ABDGH	A	にぶい橙	20	SS4周溝　外；口縁ハケ後ヘラナデ 内；口縁ヘラケズリ後ヘラナデ・体部ヘラナデ
20	杯	12.0	4.4		ADGH	A	にぶい橙	40	SS5周溝　外；ヘラケズリ　内；ヘラナデ
21	杯	(13.8)			AGH	A	橙	10	SS4周溝　外；ハケ後板ナデ・赤彩 内；板ナデ・赤彩
22	鉢				AG	A	褐灰		SS4周溝　凸帯径8.0cm　波状文
23	椀?	13.2	3.6	5.6	AGF	A	浅黄	100	SS1周溝　外；墨書「田」・挽上痕
24	壺				ADGH	A	にぶい黄橙		表採　外；ハケ・棒状浮文　内；ミガキ
25	甕				ADG	A	黄灰		H4グリッド　波状文

V　結語

1．縄文時代中期の土器について

縄文時代の遺構としては炉体土器（第９号住居跡）のみの検出であった。しかし、炉体土器に伴う土器群や包含層出土遺物はややまとまっており、縄文時代中期末の生活の痕跡が確認されたといえよう。

今回の調査区において判断する限りでは、住居跡と谷に面した包含層（捨て場）という空間利用の仕方が、単一の時期以上には継続されることなく、集落が断絶したものと見られる。遺構外からは草創期の有茎尖頭器、縄文時代中・後期の土器等が見つかっているものの、草創期、中期前半、後期前葉の遺物は非常に断片的であった。

ここでは最近の研究に照らして、当遺跡出土の中期末土器群の特徴についてふれ、まとめにかえたい。

当遺跡において検出された炉体土器は渦巻文の部分が削平によって消失しているが、胴部渦巻文系列（橋本1991）、梶山類（谷井　細田1995）と称されている土器である。

橋本勉氏は加曽利ＥⅢ式を構成する土器を加曽利Ｅ系列、波状沈線区画文系列、胴部渦巻文系列、曽利系列に整理して、土器群を考察されている（橋本1991）。

加曽利Ｅ系列はキャリパー形の深鉢形土器を主体としている。また、波状沈線区画文系列は吉井城山遺跡（岡本1963）によって知られている土器であり、加曽利ＥⅢ式の標式となった土器である。

当遺跡の炉体土器は渦巻文を施す土器を本体として（第６・７図１）、その外側にキャリパー形の深鉢形土器（第６・７図２）が差し込まれて埋甕炉を形成しており、覆土中には曲線的な磨消縄文の土器（第７図５）が伴出し、一括資料としては良好な事例のひとつと言えよう。

橋本氏の加曽利ＥⅢ式を構成する加曽利Ｅ系列、波状沈線区画文系列、胴部渦巻文系列の伴出を示す事例は諸氏の集成によって多数の住居跡一括出土資料が知られている（橋本1991、金子1997、谷井　細田1995、1997）。

３つの系統性のうち２つが共伴している遺跡は枚挙にいとまがなく、３つの系統の良好な資料が共伴した修理山遺跡（吉田1995）や良好な組み合わせの資料が複数の住居跡で出土した宿東遺跡（渡辺1998）などが代表的な遺跡としてあげられよう。

次に当遺跡の包含層出土土器について見てみよう。包含層出土土器についてもおおよそ先の３つの系統性に沿って理解される土器が多数を占めている（第11図１～７、第12図１～30、第13図47～75、第14図78～82など）。

したがって包含層出土土器も加曽利ＥⅢ式期に形成された単一時期の所産と見ることが可能かもしれない。両耳壺（第13図43～45）、条線を施す深鉢形、鉢形土器（第11図８、第14図86～99）なども加曽利Ｅ式を構成する要素である。

一方、破片資料ではあるが渦巻状の細い隆消部を胴部にもつ土器（第12図31・32・35・36、第13図76）が東北的な土器との関連において生じる点、縦位の懸垂文を隆帯で施す土器（第12図37～42）が沈線文による磨消懸垂文の土器と渦巻状隆帯の土器との関連から生じる点などが、少数の破片資料ではあるが、次段階への展開を考える上で重要かもしれない。

炉体土器、包含層土器出土土器に共通する当遺跡の土器の特徴はキャリパー形深鉢形土器、吉井城山出土土器に見られる曲線的な文様の土器、渦巻文系の土器などで構成されることであった。

逆に当遺跡に見られない土器としては鋸歯状構成による沈線文系磨消縄文土器群、岩坪類（谷井　細田1995）的な隆帯構成の土器があげられる。加曽利ＥⅣ式と称されていた土器群の主要部分であり、この点については埼玉県内における諸氏による集成においても同様な傾向がうかがえよう。

2．白鍬古墳群の成立をめぐって

白鍬宮腰遺跡のある大宮台地南部では、今日まで古墳分布の詳細が把握できていない。主な原因は、都市化にあるが、弥生時代後期を中心に調査例が増加している方形周溝墓に対して、出現期古墳や初期群集墳の情報は多くない。その意味で、白鍬塚山古墳を擁する白鍬古墳群は、大宮台地における群集墳出現期の重要な遺跡の一つといってよい。

白鍬古墳群の古墳分布は広く、大久保古墳群や側ヶ谷戸古墳群・植水古墳群など周囲の古墳群との境界も不明瞭である。現段階では、群構造や地域的な特徴などについて検討できる状況にない。

ここでは、今回の調査で得られた成果をもとに、各遺構の編年的位置と白鍬古墳群を含む白鍬宮腰遺跡の成り立ちを検討し、まとめに代えたい。

(1) 古墳時代前期の集落について

今回の調査では、古墳時代前期に属する8軒の竪穴住居跡を検出した。白鍬塚山古墳以前の前期古墳が未発見の現状では、古墳時代前期の集落が比較的集中して検出されている周辺地域の状況は重要である。

白鍬宮腰遺跡内に限っても、どの段階で集落が墓域に変化したかを把握することは、群集墳の成立や本格的な古墳を媒介とした情報社会への転換を捉える上で不可欠の条件である。ただし、大宮台地周辺における古墳時代前期の土器編年は定まっておらず、児玉郡域・上野地域・荒川下流域との関係など、解決できていない問題が多い。今後、妥当性の高い編年案が示されると思うが、その折に、対応関係が整理しやすいように、本書では現在までの編年体系に即しておよその位置を検討しておく。

検出した竪穴住居跡は、すべて床面付近か床面そのものが削平された状態であった。出土した土器は炉跡・貯蔵穴もしくは床面直上でみつかったものが多い。住居の廃絶年代に近いものと考えられるが、覆土の形成状況に不安があり、廃絶後の投棄・生活段階での遺棄などについて判断できる材料は多くなかった。

住居跡廃絶前後の資料と考えられるのは、第6号住居跡の3点（第25図1・3・4）、第7号住居跡の2点（第26図1・2）、第8号住居跡の3点（第28図5・6・7）で、第1号住居跡の4点（第19図1～4）がこれに準ずる。住居跡出土遺物は、量・器種ともに乏しいため、全体の様相をもって検討する。また、同時期の住居跡は、本来調査範囲中央部にも存在していた可能性があり、古墳時代後期の古墳跡周溝等に多量の土器が包含されていた。住居跡の土器の編年的位置付けを検討するにあたっては、これらの出土遺物についても、参考にする。

壺は二重口縁壺と単口縁壺、小形壺からなる。

二重口縁壺は、口縁部付近だけの資料がほとんどで、肩部以下の紋様の有無等については、把握できなかった。第8号住居跡・グリッドには頸部付近を遺すものがみられたが、円筒状に立ち上がる頸部から屈曲点をもって複合部が開く形状であった。調整は、ハケナデ後ミガキを施すものが主体である。棒状浮文のつく例もあり、調整とともに、弥生時代後期以来の在地の特徴を継承するものと考えられる。

単口縁壺は第1号住居跡4と、第8号住居跡4にみられるが、薄い器壁と丁寧なミガキが特徴で、畿内系の直口壺の影響が感じられる。

小形壺は第8号住居跡5に例がある。口縁が「く」字状に開き、口縁端部が「つまみあげ」られるもので、丁寧にミガキが施されていた。器形に畿内系土器の影響が感じられる反面、扁平な体部下半や調整方法に在地の要素が認められる。

グリッドでは、小形丸底土器の系譜に連なる例（第50図19）が認められた。

甕には台付甕と無脚の甕がある。

第6号住居跡1（第25図1）は単口縁の台付甕の完形品である。「く」字状に屈曲する頸部が特徴的で、丁寧なハケナデ後一部にヘラ状工具か木片によるナデが施されている。胴部中央より上に最大径をもち、胴部下半部に粘土帯接合点の屈曲がみられる。周辺地域に

おける弥生時代後期以来の台付甕の系譜上に連なるものである。

第1号住居跡1（第19図1）は、屈曲の弱い受け口状口縁をもつ台付甕である。東海系のS字状口縁甕を模した可能性が高いが、口唇部には畿内系甕の影響が感じられる。口縁の造りは雑で、屈曲が少ない。胴部のハケ調整とともに、在地的様相が多分に認められる。

無脚の甕と思われるものには第3号住居跡1（第21図1）、第7号住居跡1（第26図1）があるが、ともに球形の胴部に「く」字状に屈曲する口縁部が短く外反するものである。底部の形状は明らかでないが、畿内系甕の影響を認めることができる。また、第6号住居跡2の口縁部は輪積み痕を残すもので、周辺地域に多く分布するものである。

高杯には良好な資料がないが、第6号住居跡4の脚部は東海西部の廻間様式期にみられる小形高杯脚部に似るものである。なお、住居跡出土遺物には畿内系の柱状脚部をもつ高杯ではなかった。

甑は第6号住居跡で出土した(第25図3)。二重口縁をもち、体部は丸みを帯びており、ハケナデ後粗いヘラナデが施されていた。

当該期の土器編年作業は、日本考古学協会主催による新潟シンポジウム以来、庄内式土器研究会による最新の成果まで、各地の様相の明確化と編年体系のすり合せを中心に行われてきた。大宮台地をはじめ、いわゆる五領式、石田川式土器分布範囲では、概念規定の曖昧さと研究者個別編年の多様な提示によって、東海・畿内の編年を介して検討せざるを得ない状況が続いている。大宮台地では、地形的な区分に対応した小地域における状況も複雑で、書上による編年案（書上1994）が提示されて以来、特別な前進を認めることはできない。今回の調査結果では、量的な制限から、遺跡単位で編年を行うこともできない。ここでは、将来の検討と古墳群成立にかかわる状況整理という本書の主旨に対応できる範囲で、最新の北武蔵地域の編年(山川・福田・石坂1998）および周辺地域の編年等（牛山1998）に対比するまでとしておきたい。

今回の調査で得られた住居跡出土土器群の全般的な様相については、次のようにまとめることができる。型式上区分できる内容ではない。畿内・東海系土器が一部に認められるものの、定型化したものがほとんどみられない。また、一個体内の部分的な特徴に外来系土器の影響を受ける反面、在地の基本的な製作技法でつくられているものが多い。こうした様相は、在来土器を基本に一部の情報を取り入れたもの（福田1998）で、畿内の影響が集落単位で強弱まだらに発現していると考える石坂俊郎の指摘（山川・福田・石坂1998）があたっているのだろう。

器種構成や土器群全体の特徴からみて、書上元博の2段階（書上1994）に平行するものと考えられるが、東京低地を中心に編年した牛山英明のⅠ－4からⅡ－1段階(牛山1998)、もしくは、新潟シンポジウムの8・9期（日本考古学協会1993）程度を視野に入れておく必要があるだろう。今後、当該時期の土器編年について練り直されると考えられ、確実な編年的位置付けは一旦棚上げにしておくのが良策だろう。

グリッド出土遺物には、5世紀中頃のコップ形の鉢あるいは直口系の壺と思われる須恵器片（第50図22）や、同時期の高杯（同図12・13・16・17）、杯（同図20）等も出土している。西側に隣接する平成3年度調査範囲では、明瞭なカマドをもたない中期から後期初頭と思われる竪穴住居跡も検出されており、集落が古墳時代前期から中期まで継続していた可能性を示唆するものである。中央部の削平が惜しまれる。

(2) 白鍬古墳群の様相

白鍬古墳群は白鍬宮腰遺跡・白鍬遺跡・与野市八王寺殿ノ前遺跡に分布する群集墳であり、大久保古墳群を広義にみて、その一部であるとする場合もある。白鍬宮腰遺跡の北側には、鴨川による侵食によって分断された荒川自然堤防と大宮台地からのびる日進与野支台、指扇支台へと古墳分布が途切れなく続いている。南から順に、側ヶ谷戸古墳群・水判土堀の内遺跡・植水古墳群である。都市化の状況や開発計画の多寡等に

よる影響もあるが、侵食された台地上に河川堆積物をのせた範囲5km程にわたって連続的に分布する状況は、北足立郡域屈指の密集地といってよい。

冒頭にも記したとおり、群集墳としての性格を検討するには、これまでに行われた当地域における調査結果では、あまりにも情報が不足している。ここでは、今回の調査で検出した古墳の年代を絞り込み、群集墳成立に至る契機に触れつつ、今後の問題点を整理しておく。

古墳跡出土土器の編年的位置付け

今回の調査で検出した古墳群の年代を検討するための材料は、主に2つある。1つは出土土器であり、もう1つは第2号古墳跡周溝覆土にみられた火山灰と思われる土壌である。形状等のわかる出土土器は模倣杯が主体で、形態的特徴から6世紀初頭を前後するものと思われる。火山灰と思われる層がHr-FAと特定できれば、当遺跡独自に土器様相を把握しても一定の年代推定の根拠となるが、調査時点では分析や充分な観察を行うことができなかった。このため、火山灰とみられる土壌は、土器様相の補完的要素にしかなり得ない。

そこで第一に、出土した模倣杯の特徴を把握し、周辺遺跡を中心に、当該時期前後の模倣杯の状況を概観し、これと比較してみたい。なお、以下では、火山灰と見られる土壌を「火山灰」と表記する。

模倣杯は、第2号古墳跡で5点、第4号古墳跡で5点、第5号古墳跡で2点、第6号古墳跡で1点の計13点が出土している。

第2号古墳跡の模倣杯は、すべて完形品で、陸橋部脇の「火山灰」を含む2層内（「火山灰」層より上）に正位で3点、逆位で1点が集中して、離れた位置の3層上に正位で1点が出土した。集中して出土した4点は2個1対で設置されたと考えられる状態であった。陸橋部付近の1点は底部に焼成後穿孔が行われていた。

第4号古墳跡の模倣杯は、すべて完形品で、陸橋南側底面付近に正位で2点、周溝真南底面付近に正位で3点（うち2点は重なって）が出土した。「火山灰層」は肉眼では観察できなかったが、第4号古墳跡上層（1～3層）が、第2号古墳跡で「火山灰」を含む黒褐色土下の3・4層に類似しており、第4号古墳跡の埋没が進んでから「火山灰」が堆積した可能性がある。

第5号古墳跡の模倣杯は、完形品1点と復元後完形になった破砕品1点である。周溝南西部の底面に正位で出土した完形品は、須恵器杯身模倣杯で、元来置かれていた可能性が高い。須恵器杯身模倣杯は、今回の調査範囲内ではこの1点に限られる。また、周溝北側部分の覆土中からは、復元によって完形になった須恵器杯蓋模倣杯が破砕した状態で出土した。覆土中に「火山灰」層は観察できなかったが、第5号古墳跡上層（1～2層）が、第2号古墳跡で「火山灰」を含む黒褐色土の2層に類似しており、第5号古墳跡の埋没が一定程度進んでから「火山灰」が堆積した可能性がある。

第6号古墳跡の模倣杯は、陸橋部と思われる部分の西側底面付近に完形品1点が正位で出土した。覆土が一定程度堆積した後、覆土上に置かれた可能性が高い。覆土と「火山灰」層の関係は明確にできなかった。

出土した模倣杯は数量的には少量であるが、完形品が多く、器形・製作技法等について、よく把握できる。器形がきわめて規則的に作られているため、口縁部立ち上りの形状・口唇部の作りと形状・体部との境界をなす稜の製作方法・内底部の形状を基に6つの類に分けることができる。

a類は、口縁が外反ぎみに立ち上り、口縁部付近の器壁が薄くなるもので（口縁立ち上り下半が丸みを帯びる印象がある）、口唇部は面取りされている。体部はやや浅いものの、内底は最深部が広い。製作技法上の特徴では、口唇部をヘラ等によって平滑に仕上げた後、端部のつぶれた部分を内外両側から挟んで横にナデつける技法が明瞭である。この横ナデの痕跡は内面に弱い稜を作っている。体部との境界をなす稜は口縁の外反に比べ外側に飛び出す印象は受けないが、成形段階で一旦内側に内傾させていた口縁立ち上り部分を、外反ぎみに直立させることで作りだし、ヘラ状工具の角

を用いてきれいな段に仕上げている。稜頂部には明瞭なヘラケズリの痕跡はない。体部全体にヘラケズリ後ナデが施される。第４号古墳跡１・２・４（第36図）（４は口唇外側が丸くなるが、これは面取り後のナデの影響である）、第２号古墳跡４（第32図）がこれにあたる。なお、下記のａ２・ａ３類と区別するため、これらをａ１類とする。

製作技法が共通するものに、大型の模倣杯である第４号古墳跡５（第36図５）のほか、第５号古墳跡２（第37図２）がある。第４号古墳跡５は、当該時期には法量分化が考えられるため、ａ２類としておきたい。

第５号古墳跡２は、口縁が直立することに特徴があり、体部との境界をなす稜のヘラナデがやや雑で、内底も狭く浅い。これをａ３類としておきたい。

ｂ類は口縁が外湾しつつ開くもので、口唇部は面取りされている。ａ類同様口唇部をヘラ等によって平滑に仕上げた後、内外から挟んで横ナデするが、器形に影響をおよぼすほど強くない。体部との境界をなす稜は外側に飛び出す印象は受けないが、ヘラ状工具の角を用いてきれいな段に仕上げている。稜頂部には明瞭なヘラケズリが施される。体部全体にヘラケズリ後ナデが認められる。第４号古墳跡３（第36図）がこれにあたる。

ｃ類は口縁立ち上りが直立後外反するもので、製作技法としてはａ類と共通点する。しかし、口唇端部の面取りが不充分で、体部との境界をなす稜もヘラ状工具の角によって部分的に作り出されている。器高が高く深い印象があるが、器壁が厚く、ａ類に比べ内部が浅く、作りは雑である。本来ａ類に属するのかもしれないが、作りの粗さが顕著で、製作工程を同一と確認することはできない。第６号墳１（第38図）がこれにあたる。

ｄ類は口縁が短く外反し、口縁上部が丸みを帯び、口唇部が直立するもので、体部が浅いことに特徴がある。口唇端部は、つまむような横ナデによって、薄く丸く仕上げられている。口縁上部が内湾するのは、体部との境界をなす稜を作り出す際に、一旦内傾させて外につまみ出すためである。このために、立ち上り内面には強い稜線が生じている。体部との境界をなす稜は、ヘラ状工具の平の部分を用いて弱くナデツケることで作り出されている。体部の内底のやや広い第２号古墳跡１・２（第32図１・２）と、きわめて浅い体部が特徴的な第２号古墳跡３・５（第32図３・５）がある。前者をｄ１類、後者をｄ２類とよぶ。第２号古墳跡１には体部にナデが施されるが、他のものは明瞭ではない。稜頂部のヘラケズリは第２号古墳跡５で明瞭である。

「火山灰」を鍵層にすると、下層にあるａ１類・ａ２類・ａ類と共通する口唇付近の技法をもつｂ類、これらに遅れるｄ類という順の相対年代が与えられる。遺構の状況から位置付けが難しいが、ａ３類およびａ類に似た製作技法によるｃ類については、両者の中間的な位置づけが妥当で、やや前者に近い時期が考えられる。

当該時期の古墳祭祀に用いられた模倣杯の編年には、大宮台地北端の新屋敷遺跡における豊富な出土品をもって検討した大谷の研究（大谷1998）がある。また、同時期の模倣杯を含めた総合的な編年は、県北部地域の大規模集落毎に、近年行われたいくつかの仕事がある（磯崎1997・佐藤1998・山川1995等）。

これらの編年は、基本的に遺跡単位で行われたものであり、直接当遺跡の状況にあてはめるには、地域的な型式差が障害となる。また、Hr-Faが指標とされる場合も、多くがブロック状のいわゆる「純層」として認知されたもので、降灰層順が確認されていないなど、早田によって指摘されたテフロクロノロジー上の問題（早田1998）は解決されていない。このため、各編年で鍵層とされているHr-Faの上下で地質学的な年代差が保証されると断定できない状況にある。

幸い、大谷編年では、古墳祭祀に用いられたと思われる模倣杯と須恵器の確実な供伴例をもとに骨子が組み立てられている。次に、周辺遺跡における須恵器と模倣杯との供伴事例にあたり、地域的様相を把握した後、大谷編年との整合を図り、当遺跡古墳跡出土土器

の編年的位置付けを行うことにする。

周辺遺跡で、当該時期の模倣杯と須恵器が伴出した事例は多くない。管見に触れた調査結果を検討してみよう。

白鍬古墳群を含む広義の大久保古墳群分布範囲に入る浦和市本村遺跡第１次調査（埼玉大学1967）で検出した第１号住居跡では、須恵器蓋の口縁部付近が出土している。口唇部は面取り後、沈線が施されており、口縁部下の凸帯も断面三角形にとがっている。ＴＫ23～47以前に並行するものとしてよいだろう。模倣杯は本書のａ１類・ａ２類・ａ３類がともない、石製模造品も出土している。

1988年には、本村遺跡第Ⅶ地点が調査され、第７号住居跡から須恵器と模倣杯が出土している（山田他1993)。模倣杯は本書のａ２類が貯蔵穴脇に割れた状態で出土しており、本来的に住居跡にともなうものとしてよいだろう。須恵器は一段透かしの高杯脚部と蓋でＴＫ47並行と考えられる。在来系の杯と比企型杯がともなっている。しかし、報告書には須恵器の出土状況が記載されておらず、供伴関係は確実とはいえない。住居跡にカマドはなく、壁際によって焼土が認められた。初期カマドが存在した可能性もある。

1972～75年に調査された伊奈町の大山遺跡では、Ｃ区第１号住居跡およびＣ区第３号住居跡に須恵器と模倣杯との供伴例がある（埼玉県教育委員会1979)。Ｃ区第１号住居跡では本書ｂ類の模倣杯とＴＫ47～ＭＴ15並行と考えられる須恵器杯が出土している。Ｃ区第３号住居跡では本書ｄ１類・ｄ２類の模倣杯とＭＴ15程度の須恵器杯が出土している。須恵器はともに在地産の可能性もあるため、型式論上問題がないとはいえない。

Ｃ区第３号住居跡は、カマド周辺に完形品が集中し、生活段階に近い状況と判断できる遺存状態であった。出土遺物には、ｂ類に似た立ち上りをもつ個体もあるが、体部との境界をなす稜がほとんど段差なく作られており、口唇部の面取りも外傾し、シャープさに欠ける。完形品主体の他の遺物と異なり、細かく破砕していた。他にいわゆる和泉式期の椀に近い形態の杯も出土しているが、３分の１を欠いている。ともに、当住居跡の他の遺物にともなわない可能性があり、ここでは除外しておく。

以下に、このほかの参考事例を挙げておく。白鍬遺跡第２地点で検出された第１号古墳では、模倣杯と模倣杯出現以前の系譜を引く在来系の杯とが周溝底面にまとまって置かれていた。当古墳は埴輪をもったと考えられており、Ｂ種ヨコハケ調整の円筒埴輪片が出土している(柳田他1995)。模倣杯の形状は、体部から強く内側に屈曲させた後、口縁を立ち上らせており、口唇部は面取りせず丸く仕上げている。体部と口縁立ち上りとの境界に稜をもった椀もともなっている。

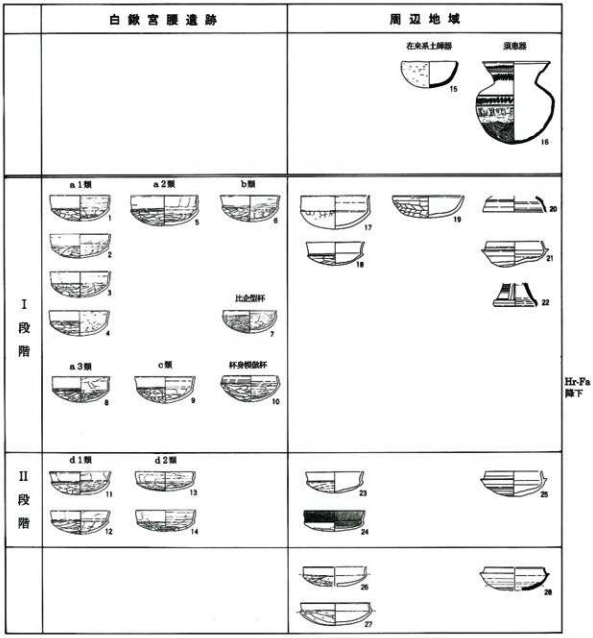
白鍬遺跡では、かつて古式須恵器と土師器杯・椀各１点が、工事中に発見されたことがある（青木1966)。報告には深い遺構内から出土したとあり、位置関係からみて、白鍬１号墳北側に存在する未知の古墳の周溝内である可能性もあるが、詳細は不明である。須恵器はＴＫ208程度に並行すると考えられる。供伴関係は疑わしいとされるが、ともに得られた土師器は在来の系譜を引く椀・杯であった。

上記の内容を第51図にまとめ、今回の調査で得られた模倣杯を相対年代で序列化した。Ⅰ段階はａ１類・ａ２類・ｂ類に、Ⅱ段階はｄ類に代表される。

それぞれの段階に類似品が出土する中間的なａ３類・ｃ類は位置付けが難しいが、杯の作りは基本的にａ類と共通し、Ⅰ段階にあるものの、粗雑な方法を用いており、内底面が狭く、体部断面も直線的で底の尖った印象がある。ａ１・２類、ｂ類とｄ類を比較してもわかるが、全体に浅くなる流れがあることは確かである。

地域的に異なるが、周溝底面付近にHr-Faと思われる白色火山灰をもつ埼玉古墳群第２号墳(柳塚古墳)では（利根川章彦氏ご教示による。報告書では火山灰ではなく粘土とある)、周溝底面からＴＫ47段階の須恵器蓋・杯とともに本書ａ３類、口唇部面取りはややしっかりしているもののｃ類としてよい模倣杯各１点が

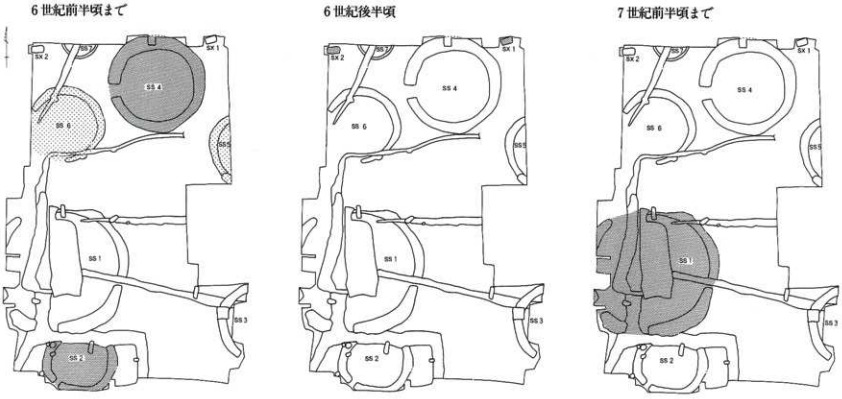
第51図　白鍬宮腰遺跡周辺の土師器杯の変遷



Hr-Fa降下前後の土器群［I（後）段階］

1・2・4～7：第4号古墳跡　3・11～14：第2号古墳跡　8・10：第5号古墳跡　9：第6号古墳跡　15・16：白鍬遺跡　17・19・20・22：木村遺跡第Ⅶ地点第7号住居跡　18・21：大山遺跡C区第1号住居跡　23～25：大山遺跡C区第3号住居跡　26～28：水判土堀の内遺跡第11号住居跡　29～35：埼玉第2号墳（梅塚古墳）

第52図　古墳の変遷


6世紀前半頃まで
SX 2
SX 1
SS 4
SS 6
SS 5
SS 1
SS 3
SS 2
6世紀後半頃
SX 2
SX 1
SS 4
SS 6
SS 5
SS 1
SS 3
SS 2
7世紀前半頃まで
SX 2
SX 1
SS 4
SS 6
SS 5
SS 1
SS 3
SS 2

出土している。内底面や断面の形状に共通点がある。これらの土器がHr-Fa降下前後のものであると考えるのは、さほど無理があることではないだろう。このことは、当遺跡第2号古墳跡の「火山灰」層がHr-Faであることを示しているといってよい。

現在のところ周辺地域に火山灰や須恵器から当該時期の様相を示すと認定できる良好な資料は提示できないが、今後の資料の増加と分析によっては、一つの時間的まとまりとして認定され、型式的に区別されていくかもしれない。本書では、a3類・c類は、II段階につながるI段階でも後発的な特徴をもつ可能性が高いという表現にとどめたい。

大谷編年に照らすと、本書のI段階がHr-Fa降下以前の大谷編年Ia期からIb期を主体とし、後半にHr-Faの降下時期を含み、II段階がHr-Fa降下以後の大谷編年II期にあたる。今後、当地域では、在来系杯・口縁を丸く仕上げる杯・口縁を面取りで仕上げる杯の供伴関係、Hr-Fa降下前後の様相の具体化等を考慮し、編年作業を行うことになるだろう。

現在のところ良好な資料が不足しているため、古墳出土土器と集落出土土器の年代上の問題をとりあえず置いて、上記の結果から考えられる模倣杯の実年代を予想しておけば、近年の埼玉稲荷山古墳の調査結果からみて、TK47は5世紀後半から末と考えられ、本書のI段階は5世紀後半～6世紀初頭前後、II段階は6世紀前半から中ごろにかけてとすることができる。当遺跡周辺地域では、5世紀後半代のTK23～47段階に模倣杯が出現し、急速に在地の土器にとって代ったと考えておきたい。

なお、水判土堀の内遺跡第11号住居跡では、TK10段階並行の須恵器杯と模倣杯が出土しているが、模倣杯の形状は、体部が本書d類のように浅く、口縁立ち上りがより短くなっている。II段階の杯とは明瞭な形態差があり、須恵器編年に照らせばこれを当該地域におけるIII段階としてよいのかもしれない。

さて、出土遺物から考えられる古墳の築造時期であるが、祭祀的色彩の強い遺物からこれを確定することはできないことを前提に、敢えて遺物の年代から類推すると次のようになる（第52図）。

なお、古墳間に設けられた埋葬施設については出土した鉄製品の年代（小久保他1983）からみて、およそII段階以後にあたると考えられる。

（6世紀前半頃まで）

第2・4号古墳跡

第5・6号古墳跡（やや遅れるか？）

（6世紀後半頃）

第1・2号埋葬施設跡

（7世紀前半頃まで）

第1号古墳跡

第1号古墳跡では7世紀前半頃と思われるフラスコ形瓶が出土しているが、側ヶ谷戸・植水古墳群等の状況をみると、大型の古墳は墳輪をもち、6世紀後半の築造である場合が多い。しかし、墳輪をもたないこと、第2号古墳跡と周溝が重複していたことからみて、6世紀後半から7世紀初め頃を築造時期と考えたい。

第3・7号古墳跡の築造時期は不明である。

ところで、出土した土師器杯は、多くがヘラケズリ成形後、ナデによって表面を平滑に仕上げており、内面および外面口縁部が厚い化粧土によって赤彩されていた。新屋敷遺跡の古墳跡出土模倣杯を検討した大谷は、作りのよい土器群を評して、古墳祭祀用につくられた「精製土器」と考え、型式的に古い要素を備えている可能性があるとしている（大谷1998）。作りのよさは、当遺跡出土土器も同様であるが、水判土堀の内遺跡・本村遺跡など、同一地域に分布する集落遺跡では、風化が激しいものの、化粧土を塗って赤彩した模倣杯が住居跡・溝跡・祭祀跡を問わず出土している。新屋敷遺跡周辺集落の土器様相とは異なり、現段階では古墳祭祀用に製作した器と推測するのは差し控えたい。

なお、赤彩の際に、底部中央を帯状に塗ったり、内底部中央を塗り残すものがあったが、古墳祭祀に特別なものと考えるより、現時点ではI段階の時期的特徴と考えておきたい。

白鍬古墳群の成立と展開

上に記した各時期の様相から、現時点でわかる白鍬古墳群の成立と展開についての事項を整理して、まとめとしたい。

白鍬宮腰遺跡周辺の遺跡群は、古墳時代初頭頃までに形成された自然堤防と台地上面を利用して、集落を形成していたと考えられる。墓域と集落の関係を明確にすることは難しいが、大久保領家片町遺跡などの方形周溝墓群が存在し、周辺に近年発見されている同時期の集落とあわせた検討が、今後行われていくと思われる。

白鍬塚山古墳築造前後の5世紀中ごろには、いわゆる初期群集墳としての白鍬古墳群の造営がはじまる。それ以前に営まれた集落上に築造されており、集落の移動・廃絶等が推測できる。塚山古墳築造から群集墳出現初期までに対応する住居跡は、本書報告分の調査範囲西側に隣接する平成3年度調査範囲で検出されている。本文中にも記したが、出土遺物の状況からみて、後期群集墳で占められていた本書報告分の地点にも同時期の住居跡が存在した可能性は低くない。

この頃、大宮台地北部では、稲荷山古墳を中心に埼玉古墳群が造営を開始し、またこれと関係をもつ新屋敷遺跡などで群集墳が出現している。白鍬古墳群と周辺群集墳の成立も、こうした状況の中で評価されるものである。初期須恵器の出土や古墳周溝の形状、小規模古墳の存在、2個1組の土師器杯を基本とする土器供献状況の共通性などからみて、一概に在地勢力と埼玉勢力とを対立的に記述するのは避けるべきで、共通点も目に付く。ただ、古墳間に行われた粘土被覆をもつ埋葬は、埴輪棺を用いる新屋敷遺跡等とは異なる様相といえ、地域性を反映しているのだろう。

白鍬古墳群が最盛期を迎えるのは6世紀前半から中頃で、7世紀前半までには造営を終えたものと考えられる。6世紀後半以後、最盛期を迎える側ヶ谷戸古墳群・植水古墳群と対照的である。後者の井刈古墳では、生出塚遺跡で焼成されたとみられる馬形埴輪等が出土している(山崎他1987)。また、前者の台耕地稲荷塚古墳に凝灰岩截石切組積石室が、山王山古墳でも凝灰岩による嗣張石室が検出されている(塩野他1973)。埼玉古墳群周辺・白鍬古墳群周辺における同時期の内部主体の状況はともに判然としないが、複室構造の有無等、埴輪の流通と必ずしも一致していない。

今後も狭い調査範囲における調査が続くと思われるが、古墳前期集落の下限と古墳群の成立・終末時期、埴輪産地・内部主体の状況等からみた周辺地域との関係を模索し、資料の蓄積を待って今回の調査成果も再評価することになるだろう。

引用・参考文献

青木義脩　1966「浦和市白鍬発見の須恵器と土師器」『埼玉考古』第４集
青木義脩他1977「白鍬中学校校庭遺跡」浦和市遺跡調査会報告書３集
青木義脩他1983「馬場（小蛍山）遺跡（第５次）」浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第３集
青木義脩他1984「松木遺跡（第２次）」浦和市東部遺跡群発掘調査報告書第４集
青木義脩他1985「北宿遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書第54集
青木義脩・高野博光　1976「大古里遺跡発掘調査報告書」
青木忠雄　1971「埼玉県鴨川流域の布目瓦出土遺跡に関する予察」『浦和考古学会研究調査報告書」第４集
天野賢一他1991『円正寺遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書　第140集
岩田明広　1998「今井条里遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第192集
牛山英明　1998「東京低地周辺における土器群の画期と交流」「庄内式土器研究XVII」
浦和市教育委員会1961「浦和市の古墳調査」「文化財の調査」第７集
浦和市教育委員会1986「白鍬塚山古墳発掘調査報告」「浦和市文化財調査報告書」第三十二集
浦和市郷土文化会1971「白鍬かね山古墳群発掘調査報告書」「うらわ文化」第７号
大谷　徹　1998「新屋敷遺跡Ｄ区　第１分冊」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第194集
大塚初重・坂本明美1959「埼玉県白鍬遺跡の須恵器」「駒台史学」第９号
岡本　勇　1963「横須賀市吉井城出第１貝塚の土器（二）」「横須賀市博物館研究報告」第７号
小倉　均他1986「井沼方遺跡（第８次）発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書　第59集
雀上元博　1994「稲荷台遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第139集
金子直行　1997「戸崎前遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第187集
君島勝秀　1996「五関中島／境根」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第181集
君島勝秀　1999「大久保条里／外来／神田天神後」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第206集
小久保徹他1983「埼玉県における古墳出土遺物の研究Ｉ」「研究紀要」'83　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
埼玉県教育委員会1979「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書　第23集
埼玉県教育委員会1994「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」
埼玉大学考古学研究会1967「荒川下流域における考古学的調査第１次調査」「鳳翔」第３号
埼玉大学　1967「本村遺跡第１次発掘調査報告書」
坂口　一　1991「土器型式変化の要因－群馬県における出現着の須恵器模倣土師器の様相－」「研究紀要」８　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂口　一　1993「火山噴火の年代と季節の推定法」「火山灰考古学」
佐藤廣二　1998「砂田前遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第198集
塩野　博他1973「台耕地稲荷塚古墳発掘調査報告書」「大宮市文化財調査報告」第６集
早田　勉　1998「テフロクロノロジー（火山灰編年学）の新たな展開とその利用法」「北海道考古学」第34輯
立本新一郎他1985「原遺跡発掘調査報告書」大宮市遺跡調査会報告　第12集
高橋淳子　1996「鴻沼の開発について－鴻沼から高沼用水へ－」「浦和市博物館研究調査報告書」第23集
高山清司他1983「庚申塚発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書　第27集
高山清司他1985「白鍬宮裏遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書　第51集
高山清司・小宮山克2.1986「かね山古墳発掘調査報告」「浦和市文化財調査報告書」第三十集
田中英司他1984「明花向・明花上ノ台・井沼方馬場・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第35集
田中正夫　1992「四本竹遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第122集
谷井　彪・細田　勝　1995「関東の大木式・東北の加曽利Ｅ式土器」「日本考古学」第２号
谷井　彪・細田　勝　1997「水窪遺跡の研究」「研究紀要」第13号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
戸田市　1981「戸田市史資料編１　原始・古代・中世」
中村誠二他1985「馬場北・馬場小蛍山遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書　第50集
中村誠二他1988「北宿・馬場北遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書　第91集
中村誠二他1989「北宿西遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書　第116集
中村誠二他1992「大古里遺跡（第13地点）・白鍬宮裏遺跡（第３地点）・本歪遺跡（第５地点）・白鍬遺跡（第３地点）」浦和市遺跡調査会報告書　第17集
西口正純　1996「中里前原遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第176集
日本考古学協会1993「東日本における古墳出現過程の再検討」
橋本　勉　1991「向山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第106集
橋本　勉　1994「中妻三丁目遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第159集
水村孝之・田中英司・西井幸雄1983「大宮台地における先土器文化」「埼玉県埋蔵文化財調査事業団紀要83」
三友國五郎1959「関東地方の条里」「埼玉大学紀要」社会科学編第８巻
三友國五郎1965「荒川低地の開発に関する先史地理的研究」「埼玉大学紀要」社会科学編第13巻
宮内正勝　1980「中里前原遺跡－第一次発掘調査報告書－」

宮崎由利江他1980『かわ山古墳周堀発掘調査報告書』
宮滝由紀子1993『水判土堀の内・林光寺・根切』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第132集
村田健二　1998『息山遺跡』『樋の上／息山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第205集
村田健二他1998『木曽良遺跡の研究(1)－弥生時代の環濠集落を中心に－』『研究紀要』第14号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
山形洋一　1985『宮ケ谷塔其塚』大宮市遺跡調査会報告　第13集
山口康行他1991『Ｂ－66号遺跡・Ｂ－91号遺跡・Ｂ－92号遺跡』大宮市遺跡調査会報告　第32集
山崎憲人他1987『稲荷塚古墳周溝確認調査報告』大宮市文化財調査報告　第23集
山田尚友他1989『白鍬宮脇遺跡発掘調査報告書（第２次）』浦和市遺跡調査会報告書　第123集
山田尚友他1990『白鍬遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書　第126集
山田尚友他1990『大久保条里遺跡発掘調査報告書（第４次）』浦和市遺跡調査会報告書　第132集
山田尚友他1993『本村遺跡発掘調査報告書（第Ⅶ地点）』浦和市遺跡調査会報告書　第167集
山田尚友他1996『大久保領家遺跡発掘調査報告書（第４次）』浦和市遺跡調査会報告書　第214集
山田尚友他1997『松木遺跡発掘調査報告書（第19次）』浦和市遺跡調査会報告書　第226集
柳田博之他1987『原山坊ノ在家遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書　第84集
柳田博之他1987『上大久保新田遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書　第86集
柳田博之他1994『井沼方遺跡発掘調査報告書（第12次）』浦和市遺跡調査会報告書　第185集
柳田博之他1995『白鍬遺跡発掘調査報告書（第２地点）』浦和市遺跡調査会報告書　第198集
柳田博之他1996『大久保領家片町遺跡発掘調査報告書（第５地点）』浦和市遺跡調査会報告書　第215集
柳田博之他1997『真鳥山城遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書　第222集
山川守男　1995『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第150集
山川守男・福田　聖・石坂俊郎1998『北武蔵における土器群の画期と交流』『庄内式土器研究XⅦ』
吉田　稔　1995『修理山遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第158集
渡辺清志　1998『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第197集